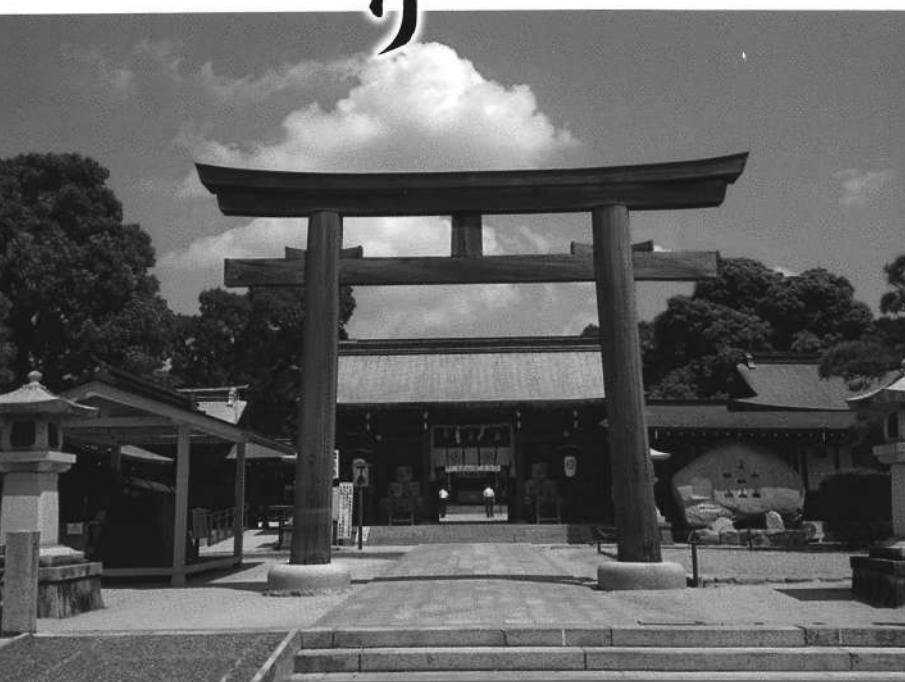


天皇陛下御即位奉祝

栄の国から
令和の祈り



天皇陛下御即位奉祝

講話集

栄の国から
令和の祈り

第三十五回神道講演全国研修大会 九州大会

【表紙写真】 佐嘉神社

裏表紙の写真は佐嘉神社に伝わる「キャノン砲」

第三十五回

神道講演全国研修大会

九州大会

天皇陛下御即位奉祝

とき

令和元年七月十六日～十八日

ところ

佐

嘉

神

社

目次

御挨拶

第三十五回神道講演全国研修大会 九州大会 会長
神道講演全国協議会 会長

山本行恭

(三重県 椿大神社 宮司)

記念講演 食國天下のまつりごと

佐嘉神社 元宮司

草場昭司 1

子供たちの目に輝きを

營田英聖 16

鎮守の杜に集う人々 祭りの心

桐本千枝 21

宮崎家の人々 大嘗祭当日祭にあたって

宮崎國忠 25

大祓詞の心

芝幸介 30

日本人の御霊祭りについて

新名紀夫 36

陛下のお言葉 令和の御代を寿いで

村瀬佳子 39

神道とは

神葬祭（一年祭と納骨）を終えて

令和の御代替わりと神社のおまつり

靖國神社御創立百五十年を迎えて

令和と神社　　神社からのお茶

この国の民度

佐嘉神社について

機関紙の発行について

「二つの足あと」と小さな楽しみ

奥山剛史 45

稲葉政信 49

塩崎昇 54

小國紘平 59

江崎視佳 64

鈴木明子 68

落合洲造 73

住吉紀子 79

木下久榮 82

沖縄と神社

天孫降臨にみる令和の御大典

義長（どんど焚き）の日に

「日本人と神社」と「ご縁」

私の足跡は私の財産です

男はこうでなければならぬ

人生儀礼について

神と弓

学校で習わないキリシタンの歴史

崎山喜理 86

伊賀昇三 90

寺本正徳 96

田中達也 101

山浦一男 105

河本文夫 110

前中俊二 116

瀬戸一徳 120

大島靖彦 124

名付けの難しさ

山田 誠也

130

キリシタンの島々から

田口 孝雄

135

願いをこめて

佐々木美津子

140

目に見えない力

山下 裕嗣

144

令和の御代 靖國神社御創建百五十年を仰ぐ

芦原 高穂

149

『祈る』ことの大切さ

宮田 修

154

令和の世の賞味期限

村田 和之

158

日本人の心 ―日本神話とみそぎ―

山本 行恭

164

御挨拶

第三十五回神道講演全国研修大会 九州大会 会長

神道講演全国協議会 会長

山本行恭

(三重県 椿大神社 宮司)

先ず、本大会の趣旨をお汲み頂き、快く会場を御提供下さいました佐嘉神社・前宮司草場昭司様をはじめ全職員の方々には大変なお世話を賜りましたこと、会を代表してお礼を申し上げます。誠に残念ではありますが、その後令和二年二月十一日に御帰幽され御国替えをされましたことに對し、心よりお悔み申し上げますとともに、賜りました恩情に報わねばと新たに意を決した次第でございます。

さて、斯様の通り今回は、肥（日）の国の佐賀県で総数三十二名が猛暑の七月十六日から十八日の二泊三日に亘り、講演研修大会を開催致しました。当日の熱暑もさることながら全神職、日頃の鍛錬の成果を正に滲み出る汗をもともせぬ雄々しさで、全力投球されましたことは、何よりも愉しくまた夢開き繋げる貴重な時でありました。さらなる興隆の

ため御精進されますよう深く念じております。佐賀県は、栄さかえの国と貴ばれましたのは、日本武尊の当地御巡行の際、樟くすのきの栄え繁る有り様を御覧になられ、この国は「栄の国」と呼ぶがよからうとの思し食しに起因するものと伝えられています。歴史的にも大変著名な偉人を輩出された国・県として、町並みには数多くの銅像が建てられ、詳細な説明とともに来県者の教養をも高められる、そんな歴史ある市内の官公庁の建物群が並び建つ町の中心部に立派な御社殿が御鎮座され、訪れる人々を幸せに守り導いて下さる素晴らしい環境の中で多くを学ばせて頂きました。

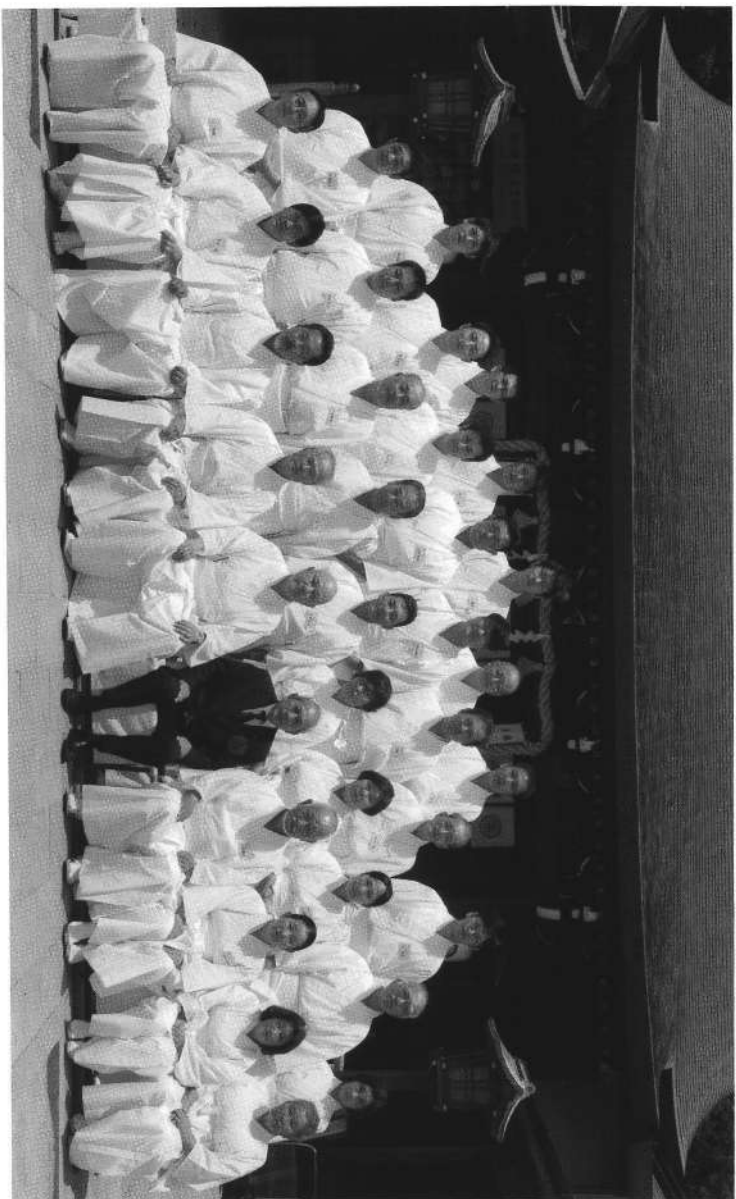
「神道教化」とは、特別に難しいものではないと思います。私どもの生活の中に深く根づいている習慣や日本各地の歴史等を踏まえて、今まで言挙げことあしなかった日常の中に、神道の教え（風習等）が存在しているのです。その慣習等に氣づかされ改めて、大切な点を今更に知らされ、覚醒させ、自覚する事々を言葉に変えて子や孫を始め、氏子崇敬者にお話しし、お伝えすることを「神道教化」という言葉に充てているだけのことなのです。

戦後七十五年を経て、日本は世界同様に大きく変わりました。技術革新の中樞を占めるIT化とデジタル化は最早当たり前前の事として生活と切り離せないものとなっています。誠に素晴らしい発展だと存じます。片や、日本の事柄や文化・伝統継承等の一部は徐々に

意識が低下している事も否めない事実です。ともすれば万事欧米化に転じて我が国の悠久二六八〇年の歴史さえ覚束ないことは勿体ないことです。さらに今年は新年早々コロナウイルスの感染拡大により生活形態も変化し、リモート、オンライン等と人と接する事の一切が阻害されました。これを機に新たな常態を模索し日常に浸透させ、開発しなければなりません。今、家庭内でのワークが増え、家族が揃って生活する時間が多くなり、娯や文化の指導等にも目を向け再活性化させる時期になっています。今まで氣づかなかった生活の中に根を張っている神道の精神、謂ゆる当たり前の精神や考え方を改めて認識を深める絶好の機会と捉えます。

全国の神職有志が今こそ心の精神のおたけびを発揮して、正しく明るい国作りの一端を担い、全国津々浦々の神社（氏神さま）のお力とお導きを頂いて、美し国、栄の国となりますようお祈り致します。斯道に多大なるお導きを下さいました佐古、石井両先生の御薫陶宜しく、互いに研鑽致したいと思ひます。

末筆ではございますが、佐嘉神社の故草場前宮司様をはじめ、会場を御提供下さり、お世話を頂きました皆々様に、さらに九州地区の神社庁全役員の方々より賜りました、御支援と御協力に改めて感謝申し上げます、お礼といたします。



第35回 神道講演全国研修大会 九州大会 令和元年7月16日 佐嘉神社

食國天下のまつりごと

佐嘉神社 宮司 草場 昭 司

こんなにまでこの講演会の組織が成長したかと思うと私は感無量でございます。

そういう意味で、今日は皆様方にこの私が神社界に入りました当時のこの様子かれこれ皆様方御存じではないと思いますので、そういったものにそつとふれさせていただいて皆様方の認識を改めていただきたいと思います。

今日は元NHKにおられた宮田先生が、ちよつと時間の都合で早くお見えいただきましたのでいろいろとご教授をいただきました。本当に世の中を知り尽くした方がそれを卒業して今度は神社界にお入りいただき、神社界のことをすべて勉強し東奔西走、本当に休む暇もない日々を暮らしておられることを私承知いたしております。そういう意味で、このような方がこの会の中にあと十人いてくだされば、日本の国も変わるがなあと思っている

ところでございます。

まあそういったところを念頭に於いて雑談を交えてお話をいたしますのでお聞き取りの程、よろしくお願い申し上げたいと思います。四月から入院をよぎなくされまして、足が弱りましたので失礼ながら座って話すことをお許し願いたいと思います。

ちょうど私が入院する前に本屋に行きましたところ、こういう本が出ておりました。「鎌田勇 皇室をお護りせよ！―鎌田中将への密命―」こう書いてある「人生最後の日に東久邇宮首相から密命を受けることになった終戦最後の秘話」これは私が入院する前に本屋でぽつと見つけて買ったのです。

それで入院しまして、あの本は何だったかなと必死に思い出してみたのですが、中々思いつかない。権禰宜に調べさせても分からない。皇室関係の本を全部持ってこいと言いまして、どんどん病室に持ってこさせましてあったのがこの本です。何故今更この本が出たのか。平成二十八年発行ですから少し前にはなりますが、何故この本なのか。それを考えていただきたい。

この本の中身を見てみますと、日本の国は昭和二十年八月十五日に終戦を迎えますが、ただちに日本は連合軍の占領下に置かれるわけです。連合軍というのはアメリカを主体に

した軍です。開戦証書にもありますように、米・英・シ（中国）ソ（ソ連）に対して日本は宣戦布告をしました。

ですから、これらの国々から日本は占領されたわけでありました。日本の国はなくなったのです。その時にマッカーサー、いわゆる総司令官のもと日本の飛行場には占領の為に連合軍がやってくることとなりました。その時に日本は「このやろう、アメリカには負けるか」と、私たちも「鬼畜米英」と言っておりました。「鬼畜」それくらい憎かった。私も昭和十八年中学部で、小学一年から六年まで三八式銃を持ち、みんな一生懸命やっておりました。アメリカの占領軍の飛行機がいつせいに各地の飛行場に來るということで、零戦など飛行機のプロペラ、羽を外し並べて占領軍が降りられないようにした。それを知った天皇陛下は「それはならん」ということで東久邇宮首相に、この宮様はこの飛行場にと遣わせて「敗軍の将、兵を語らず」と綺麗にお迎えしなさいとご命令になりました。

そうした天皇陛下の命令で宮様方が各飛行場をまわり、日本のやくざから誰でも協力して飛行場を綺麗にしました。大石良雄がああ赤穂城を綺麗にして幕府に明け渡した如く、「敗軍の将は兵を語らず」。そしたら占領軍が感激し日本の占領政策もぐっと変わったのです。天皇陛下がマッカーサーとお会いになった後の話です。こういったことがあったこ

とを私は初めて知りました。だからこれは神職たる皆様方には是非読んでいただきたい、知っていただきたいと思い紹介の意味で持ってきました。

この御代替わりがあつて天皇陛下が御替わりになられた。私はすぐに神社本庁の渉外部に電話して「この本を知っているか」と、そしたら知らない。で、これをやれと言いました。ただ、やっぱり皆様方がいらつしやる somewhere、私たちは認識しないといけない。というのは御代替わりになつて、天皇陛下が天皇陛下の御位をお継ぎになつただけでも、これははつきりいうと、この「WILL」という雑誌に竹田恒泰さんが書いています。天皇陛下が御替わりになつたけれども、三種の神器が天皇陛下のお手元になければ御譲位になつたことにはなりませんよ。さて三種の神器とは何ですか。知っていますか。八咫鏡、天叢雲剣、八咫瓊勾玉これが三種の神器です。天叢雲剣というのは、ヒの川の大蛇退治の時に尻尾から出てきた剣ということですが、何故ヒの川なのか。こういうのも皆様方は疑問を持ち勉強しないとならんです。

八咫鏡は天照大神様が、この鏡が我と思つて斎き祀れという御鏡の神勅がございます。その鏡は伊勢の神宮に御祀りしてあり、日本の大御祖その鏡が御神体です。その御鏡と同じものが宮中にございますが、これは御分霊を宮中で同じ鏡にして賢所にお祀りしてあり、

天皇陛下が常にお祀りしておられる。伊勢と御一体ということです。ですからこの御鏡を動かすことはできません。したがって天皇陛下は劍璽の御動座をいたしました。

三種の神器のうち御動座ができるのは天叢雲劍、八咫瓊勾玉ですから天皇陛下が御位をお継ぎになってからすべて劍璽の御動座をご一緒になされた。あるマスコミあたりが、何で自動車に載せてあっちいきこっちいきしなければならないのだということもありました。それは日本の国体というのを知らない人が言うことであって、この国の国民であればそのことはしっかりとわきまえておくべきだと思っております。そういうことでございますが、この御代替わりの時私はちょうど四月から入院いたしました。

今申し上げた通りこの本を一生懸命読んでいました。病院におりましたので五月一日は何もできなかった。御朱印なんかもです。ところがある人から「令和」と色紙に書いてくれないかというご希望がありましたのでこう書きました「肥前国 佐賀松原鎮座 別格官幣社 佐嘉神社 奉拜 令和元年五月一日」と。御朱印の代わりだと思っております。「別格官幣社」をみてみますと、延喜式内社のうちから人間神として特に尊崇できる方を、明治天皇様がお選びになられてお祀りされたのが別格官幣社です。二十八社あります。ところが佐嘉神社は昭和四年なのです。だからそれにかかりません。佐嘉神社の大神様は鍋島

直正公人間神であります。鍋島家の邸内社の松原神社の南殿にお祀りしておりました。それを昭和天皇様が、特に鍋島直正は別格官幣社としてお祀りご奉仕申し上げなさいという大御心をいただいてできたお宮なのです。したがいまして、延喜式には全然関係ございません。そういう神社が二十八社のうち二社あります。一社が福井神社松平春嶽公ですね。昭和十八年にできてすぐ昭和二十年に戦災で焼失しております。天皇陛下直々にお造りいただいた、当時の御社殿のままの別格官幣社は全国で佐嘉神社だけしか残っております。そういう意味で私は非常にありがたいというよりも、もったいなくてしょうがないのです。何故、鍋島直正公を別格官幣社としてお祀りしなければならなかったのか。それは維新の御鴻業を見れば一目瞭然。当然のことだと私は思うのですけれども、その別格官幣社天皇陛下にお造りいただいたが故にそれを保つ矜持というものが必要となつてきます。そういう意味では非常に何といいますか責任の重さを感じているところでございます。そういう意味で私は別格官幣社佐嘉神社と書きました。これを見たときにこれでいいのかと思つたのです。というのはただ「令和」と新元号をご揮毫したところで、だれが書いてどういう意味でどういうことなのかはつきりしないといけないだろうと思ひまして、裏の方に新元号ご揮毫申し上げますということで、新元号を書き更に私の身分、どういう意味か

を皆さんに知って貰いたいと思い書きました。

私は神社本庁より「長老」という敬称をいただいた。これはやつぱり神社本庁の統理様からいただいたのだから尊いいただきものだと思ひの自慢として書きました。その次に神社本庁総裁様より「鳩杖」を拝受いたしました。これもいままででないことだと思ひまして、ありがたく拝受いたしましたということを書きました。そして更に私が神社界で七十年間生きてまいりましたけれども、今までに神職としてのどれだけの勉強をしたかということとは皆様方の判断に任せなければならんことだと思ひますけれども、私は私なりに神社本庁からいただいた「浄階」という位を本当にありがたく思っているところでございます。更に「特級」という身分もいただきました。それでこういう男が書きましたよということですよ。そして八十八歳の草場が書きましたよと。その横に「神代不詳 皇紀二六七九 西暦二〇一九 BC」と書きました。神代じんだいというのは、日本の国は神武天皇様より神武、綏靖、安寧、懿徳、孝昭、孝安…と一代二代三代…百二十五代これを皇紀といいます。大和の橿原の畝傍山の地でご即位なさった、新暦になおすと二月十一日。これが日本の国の第一代の天皇のご即位された日ですよ、皇紀二六七九年ですよ、西暦でいいますと二〇一九年ですよという意味です。更に西暦の横にBCと書きました。BCとは何かわかりますか？ピ

フオークライスト。キリスト紀元というのは、キリストが生まれた日を紀元元年としたのです。ところが合わないのです。合わないからビフオークライスト。キリストが生まれた四年後をもって紀元元年と定めたのです。だからBCです。今の新聞社なんてこのこと知りませんよ、だから書きました。

日本の国は第一代天皇様の前の時代は何というか知っていますか？神代といひます。神代かみよ神様の国です。神代は不詳 わからないのです。年代が古ければ古いほどわからない。それくらい日本の歴史は古いということを表しています。これが神代、神様の国。みなさん不思議に思いませんか？因幡の白兎の話、大黒様の話。神代の話が今生きているのですよ。今でも話せるじゃないですか。遠い遠い神代の話が神様の話として今に生きているところとかが大切なのです。そこを理解しないと日本の国柄というのはわからない。

この前神社本庁の長老会議がありましてその時にこうゆうことを申し上げました。アメリカが占領してきて、日本を占領下におき昭和二十七年まで日本はありませんよ。独立するまで。基本的にアメリカが日本の国に憲法を押し付けた。今の憲法です。これを当時、社会党や共産党はアメリカ憲法だとかどんなに騒いだか。知っておりますか。この前の長老会議の時私は言いましたアメリカ、アメリカ憲法でさえ天皇様は日本の国の象徴であり日

本国民統合の象徴と書いてあるではないかと。日本の国体は天皇様があつて国民がボディということなのです。そうであれば天皇様が神道であらうと、国事行為であらうとすべて国体がそうでなければならぬと長老会でいいました。ですから伊勢の遷宮、お祭り、大嘗祭など私はすべて日本国民の力でやるべきだから日本の国の税金でやるべきだと主張をしてまいりました。私は日本の国の歴史の古いということは非常に尊いものはない。また、神話が現在に生きているということが不思議でなりません。そのところを皆様方理解していただきたい。

この講演会が盛大に催されることは非常にうれしいことです。実は佐嘉神社にて開催という件につきまして、少し前に大分の小野君が参りまして佐嘉神社でと。よくわからなかったのですが、うちでよかつたら使えよということでした。こんなに今日は皆様が真剣な顔で講習会においでいただいて感激しております。このような組織になるとは思いませんでした。と申しますのも私が神職になった時が昭和二十七年なのですが、当時山口県の國學院大學出はわたなきよたけ先生だったと思うのですが、山口県の國學院を出た神職は皆さん社頭講演ができるということでは有名でした。しかしそのころみんな社頭講演はあんまり大切に考えてなかったのです。

ところが神道青年会に入りましていろいろ勉強させていただきました。神道政治連盟の会長をしておられます宮崎義敬さんを知っておられますか？あの方は小学五年の時から白衣をきて武運長久の祈願をしていたそうです。昭和十二年シナ事変の時です。私は昭和五年生まれで昭和十六年は大東亜戦争ですよ。大人たちはみんな戦争に行っておりまして。私は佐賀県の機関誌「睦^{むつ}霊^{たま}」に「従軍女戦士」という記事を書きました。佐賀県の牛津というところに西川さんという神職がおられました。早稲田大学を出られまして神職になられました。奥さんは鳥栖工場というところから十九歳でお嫁に來られた。そして一週間以内に召集令状がきた。西川先生は紋付き袴に着替えられ玄關のところで「謹んでお受けいたします」と受け取って戦争に行かれました。奥さんはいくと、その時妊っており学校の先生もして家に帰ると姑もいる。そして祈願もしなければならぬ。しかし祝詞もなにも知らない。奥さんはめくらめつぼう太鼓を打って信念をもつて祈願をしました。そういう時代でした。

それで私は「従軍女戦士」という記事にしました。それはそれは大変な時代でした。男はほとんど戦場に行っていたのです。私も旧制の中学校に入りまして、一年から二年に上がるときは三八式銃を持ちました。二年生の終わりになったら学徒動員に行きました。昼

は防空壕掘り、夜は飛行機の羽作りです。昭和二十年になると、朝昼晩グラマンの空襲です。機銃総戦、爆弾攻撃です。その間を抜け私どもはいわゆるペンをなげうつて戦争に従事いたしました。

そういう時代で非常に難しい時代でした。そのころ始まったのが、佐賀県神道青年会というものがありますが、その前身は神道研究部会というものでした。はじめから勉強しなおしましょうという会でした。今の皇學館大學の理事長佐古先生のお母さんが来て下さった。このお方は本当にご熱心でおそらく一、二週間佐賀に留まりいただきました。そして、各神社あるいは各支部に行き、夜になると総代さん方も集まっていたいて神道青年会が前行をやりまして泊まり込みで講演会を行いました。いわゆる神道講演研修会のはじまりです。その佐古先生と一緒に石井寿夫先生にも加わっていたいて、講録作りから勉強させていただきました。石井寿夫先生は禊でもなんでも我々と一緒に全部やりました。石井先生は主にそちらの方を、佐古先生は泊りがけで神道青年会の者を率いて私たちが前講をしてその後始末を佐古先生がなさってくださいったという経緯がございます。それが今のこの神道講演研修会の姿になってきている。本当に嬉しく思います。

我々の時代は神職も戦争に行つて喋る人も教える人もいなかった。「言挙げせず」がほ

んなりの姿でした。ところが、石井先生、佐古先生がお見えになられてやっぱり言挙げし
ないといけない。いわゆる講演或いは社頭講話講演は、こういうものが要だということ
で我々と行動を共にしてくださった。皆様方が今日、白衣を着て真剣に言挙げいわゆる神
道の奥義を勉強なさって、それを他の方々に伝えようとする御心がけが私の胸にひしひし
と迫ってまいりまして本当に尊い感じがいたします。そういうことでございますが、今こ
こで私どもが考えなければならぬことがございます。と申しますのは、御代替わりになっ
てまた出てきだしたのが、男系女性の天皇様、宮家のことです。これは真剣に考えなけれ
ばなりません。このことを最初の方に少しお話しました。男系、直系の宮家の方々がいつ
ぱいいいらっしゃいますよと。終戦の時に十一宮家がお下がりになった。今は秋篠宮様と悠
仁様しかおられないと大騒ぎしている。ちゃんとおられますよ。東久邇宮なんて三人も明
治天皇様の直系の孫ですよ。そのお子様が五人もいらっしゃる。明治天皇様の直系ですよ。
男系男子ですよ。ちゃんとおられる。それを女性天皇とか女系天皇とかもう騒いでいる。

小林よしのりという漫画家がおりますけれど「SAPIO」という雑誌で対談をやつて
いる。その中で男系男子がおられるなら連れてこいといっている。宮様だった方を連れて
こいだなんてそういうわけにはいきませんよ。そんなことを言っている。それで女系でも

女性でもいいじゃないかと言っている。日本の皇統は男系男子となっているわけで、おりられた十一宮家の中にいらしゃいますよ。東久邇さんなんて直系の明治天皇様のお孫さんですよ。あるいは神社本庁の久邇さんだってそうですよ。皇族ですよ。小林よしのりが今そういう方々が一般の生活をされているので連れてきたからといって皇族にはなれないと言っている。私は、神社本庁で久邇さんに六年仕えましたよ。まず人柄が違いますよ。育ちが違いますよ。品格が違いますよ。そういうことをきちんと頭に入れて、そして日本の皇統を守るということを我々はしっかり考えなくてはならないと思っております。

先ほども申し上げましたとおり三種の神器もそうですけれども剣璽御動座というのはお鏡ができないから剣と璽が天皇陛下とともにすべて御動座なさる。今日の朝大嘗祭の麻の話がテレビでやっておりました。こういった本当の日本古来の行事、日本の国柄にともなうもの。こういうものは日本の国民が大切にしていかなければならない。日本国民統合の象徴であるがゆえに我々が知っておかなければならない。そういう意味で私は本日申し上げた次第でございます。

最後に私が申し上げたいことは「食國天下のまつりごと」。四、五年前に学校の先生の神職会がありました。

その時に私に講演をしてくれということで「食國天下のまつりごと」という演題をかかげました。するとこの演題を皆さん読めなかったのですよ。中学の頃の漢文の先生が、私が佐嘉神社の宮司になった時に年賀状がきました。「元旦や日本の古名を数えけり」と書かれていた。そして大八島国とかいろいろな呼び名が書かれていた。食國とか扶桑など日本の別名がいろいろある。その「食國」を学校おおくにの先生は読めなかった。國學院出もいるでしょう。皇學館出もいるでしょう。しかし読めなかったのです。何ですかあなたたちはと。「食國天下のまつりごと」これにつきますよ。(天皇陛下の御田植の写真)

天皇陛下が稲の種を蒔いてそして御自ら御田植になって、十月十七日には根っこからひいて日本の大御祖伊勢の大神様に天皇陛下御自ら御捧げになられます。「懸税」かけちからこれが天下のまつりごとです。なぜ天皇陛下御自ら御田植をなさるのか。なぜご自身で根っこからひいて伊勢にお供えなされるのか。十月十七日神嘗祭は伊勢の神宮では大重義ですよ。そして十一月二十三日今では勤労感謝の日と言っておりますが新嘗祭。天皇陛下御自らがそのお米をおいただきになり皇祖祖宗歴代の天皇様の御神霊とともにされる。それが新嘗祭です。それが天下のまつりごとなのです。その稲の種は宮中に延々と生きています。来年はまた芽が出る。再来年もまた芽が出る。甍り甍り宮中に生きています。これが万世一

系。変わることはありません。その稲の種は神御一人^{かみこいちにん}天皇陛下のお手元にあるということ。日本の国民は本来にありがたい、尊いと思わなければならないと思います。

その種を天皇陛下御自ら蒔いてお植えになり、実がなつたらまず伊勢の神宮へお供える。これが天下のまつりごと。それをなさるのは、天上の儀をいわゆる天照大御神様からお受け継ぎなつたこの稲の種を、地上でそういうふうの実現なさつて下さるのは神御一人^{かみこいちにん}だということなのです。神御一人^{かみこいちにん}だということを我々は日本国民として脳裏に刻んでおかなければならぬと思います。これが私の今日の主題でございます。食國天下のまつりごと。天上の儀を地上で御実現なさる方は神御一人^{かみこいちにん}だと。その尊い日本の国に生まれた我々のありがたさ、尊さ。これを私共はほんとうに自慢として日本国民として、世界に誇る国民にならないといけないのではないかと思います。私はこのことを皆様に言いたくてここにお伺いした次第でございます。

どうか皆様方、今後このことを頭において日本の国民を本当の姿に。いろんな私利私欲。こういうものがなくて、日本の国が本当の真の姿になるように。神職として皆様方のご指導の下に一致団結していきますように心から念じまして私の話とさせていただきますと思います。ありがとうございます。

子供たちの目に輝きを

營 田 英 聖

昨今では目を覆いたくなるような惨忍で奇怪な事件や、ながら運転や危険運転等が引き起こす交通事故が多発しているのを報道で多く目にします。我々人間は誰しもが生まれてくるとき穏やかで清らかな心を持って生まれてくるものだとは私は信じていますし、実際そうであると思います。そんな清らかで尊い心を持って生まれてくる私たち人間が、どのようなことがあってこんなにも悲惨な事件を起こしてしまうような人間になってしまうのか。

家庭環境、地域社会、各団体でのいざこざ等々、人それぞれに色々な悩みを抱えて生きていく上で変化していったことは明らかです。原因は違えど、私たちもいつ何時そのような事件を犯してしまうかはわかりません。しかしながらそうならないように必死で生きていくのが人間本来の姿、生き方です。

ここで私が思う、こうなってしまった原因の一つに、SNSなどのネット社会の普及による問題があると感じています。顔もわからぬ相手と文字だけの会話を通じ、あたかも相手のすべてを理解し信頼を築いたかのような感覚に陥り、意気投合し実際に会って危険な目に遭ってしまったりなど、ネット社会の闇が人間に及ぼす悪影響は大なるものがあると思います。

本来このネット社会の構築は、人間がより効率的にスムーズに仕事や生活を送るために先人たちが衆知を集め、絶え間ない努力によって作られた素晴らしい文化です。私を含めここにご参集の皆様も日常生活で何気なしに使っていると思いますし、正直なくなったら困ると思います。利便性を求めることは人間の進化向上にも少なからず関わってくるものであり大切なものですが、そればかりを求めると、予想だにしないデメリットが生じます。そしてその影響を一番受けてしまうのは子供たちです。

例えば、スマートフォンを幼い時から見ていると映像と音声だけで言語を学ぶので、口の動きなどが分からずうまく言葉を発することが出来なかったり、映像で見たことがあるので、あたかも体験したような感覚に陥り、それが危険な事なのかそうでないのか判断がつかず事故を起こしてしまったり、凶暴な映像などを簡単に見ることが出来るのでトラウ

マになったり、逆に好奇心からしてみたいと思ってしまうたり、パソコンの前で何でも出来るのでひきこもりになってしまったりなど、子供に及ぼす影響も尋常ではないと思います。これからの時代を担う子供たちは国の宝であり人間の希望であり何よりも尊い存在です。ではそのような尊い子供たちにどのようにしてこれから教育していくのか？何が大切であるかを伝えるのか？

すこし話は反れますが、当社では七五三の時期になりますと、色鮮やかな衣装を身に纏い笑顔がとっても可愛い子供たちが境内を賑やかにしてくれます。その光景を見るたびとても気持ちがほっこりし、心が温かくなります。この七五三は人生儀礼の一つです。人生儀礼とはこの世に生を受けてから死ぬまでにそれぞれの節目節目に行う儀礼のことで、大まかに言いますと安産祈願・初宮詣・七五三・成人式・結婚式・厄祓・年祝いなどがあります。皆様ご承知の通り、七五三では三歳は髪置（かみおき）、五歳は袴着（はかまぎ）、七歳は帯解（おびとき）という古より伝わる儀式をする祝いであり節目です。三歳の髪置とは男女ともに、この日を境に髪を伸ばし始めるという儀式で、五歳の袴着は男の子が袴をつけ始める儀式で、七歳の帯解は女の子がそれまで付け紐で着ていた着物から帯でしめる着物にかえる儀式です。なぜこのように昔の人たちは古来より節目節目の儀式を大切に

してきたのか？それはまさに、このような儀式が今までの自分ではなく、新たに責任を担う者になったとのけじめと自覚と覚悟を培うための重要なものだからです。

話は戻りますが、今の子供たちに必要なのはこういったけじめをつけさせる事です。そして私たち親がその意味を教えてあげる事です。『しつけ』という言葉があります。解釈は様々ありますが簡単に言うとは私は『しっかり』『つける』『けじめ』だと思っています。わけもわからず親に連れてこられた子供たちでも実際に神様の前で手を合わせ祈ったことは忘れないと思います。そしてこんなけじめをつけたという事は私たちが教えてあげればいいのです。ネット社会に埋もれて忙しさの中で心が亡くなり目の輝きを失い孤立してしまっている子供たちを救えるのは日本の故郷である神社で手を合わせ祈ることです。神様を敬う『信仰心』を培うことです。

実際、ある調査で、家に神棚があり幼いころから手を合わせ祈っている子供たちは、そうでない子供たちに比べ、犯罪に手を染めてしまう確率が圧倒的に少ないと聞いたことがあります。心の基に『信仰心』があれば当然の結果だと思っています。神様に恥じない生き方をしなければならぬと少しでも思えたなら犯罪など起こすわけがないですし、なにより

神様御先祖様が必ずストップを掛けて下さると思います。子どもだけに限らず大人であっても大切なのは『信仰心』です。

そんなこといっても『信仰心』なんてどうやって持つのか？持たせるのか？と難しく考えてしまう方もいるかもしれませんがとりあえず神社に来てください。子育てに悩んでいる方、ご自身が悩んでいる方、周りの方が悩んでいるのを見て見ぬふりをしている方、是非神社に来てください。来ることを進めて下さい。

神前で手を合わせてお祈りすれば必ず大神様の御心に包まれて心が楽になります。やる気が湧いてきます。そして良い方向良い方向に導いてもらえます。

最後に、世界一貧しい大統領として知られる南米ウルグアイのホセ・ムヒカ前大統領の問いである『より便利で、より豊かで、私たちは幸せになったのでしょうか』この言葉に一人ひとりが真剣に向き合い、本当の意味での幸せってなんだろうと自分なりに考え行動に移していただければ幸いです。くだらないことかもしれませんが、昔のCMに「手のしわとしわを合わせてしあわせ」とあったように、皆様が祈りを通して幸せになられることをお祈りいたします。

鎮守の杜に集う人々 祭りの心

桐本 千枝

今日は、とう組の皆さんに秋季例祭に向けての心構えについてお話致します。

ここ三谷町では、三郎池という大きなため池を中心にした集落が広がっています。農業には適した土地でした。古くは、古墳時代からの人々の暮らしの痕跡があちこちに出土しています。また、四、五十年前まで、地元の人々は子供時代から、この池で魚釣りをし、貝を取り、プール代わりに泳いだり、遊んだり当たり前のように生活の中に馴染んでいました。勿論、田植えの頃には、農業用水としてお米作りに無くてはならない大切な水です。満々と湛えた水で稲を作り、野菜を栽培し人びとの暮らしを支えて来しました。

しかしながら、自然を相手にする仕事は、天候や田んぼの管理（雑草駆除、害虫駆除、水の配分）様々な困難なことが起こってきます。農家の人のこんな声が聞こえて来ます。「百姓三十年やっても収穫する経験は三十回しか無いんや」「お米作りは、一年一年、同じ

ことが繰り返される訳では無いんや」と、その言葉の中から米作りの難しさが滲み出ています。だからこそ収穫できた時の喜びは、今までの手間をかけた苦勞と予想した収穫高になつた安堵感で一杯です。おのずと神様に手を合わせ感謝する気持ちになります。そんな米作りの稲穂一束にありがたさを感じ、神様に私たちの喜びを表わす「祭」を捧げるようになりました。

神話の世界から思い起こせば「古事記」の中に天孫降臨のお話があります。それは、瓊杵尊（ニニギノミコト）が天津国（あまつくに）天上から中津国（なかつくに）地上に下る際に天照大神（アマテラスオオミカミ）さまから三つのご神勅（使命）（天壤無窮、宝鏡奉斎、斎庭の稲穂）を受けて豊葦原瑞穂国（とよあしはらみずほのくに）の国造りの為に、猿田彦命（サルタヒコノミコト）に導かれ天上界から地上界に降臨する様子が描かれています。その様子を秋祭りで再現します。これがまさにご神幸（お下がり）です。天照大神さまから授かつた稲穂の収穫の様子、氏子の暮らしぶりをご覧になっていただく毎年の「神様の遠出」なのです。

三谷町では、この三谷八幡宮を氏神さまとして約千年くらい前からなんらかの祭祀は行われていたようですが、記録として検証できるのは千六百年代江戸時代に入る少し前から

は、書物や、宝物の記録から認識できます。それは、江戸中期から後期にかけては、かなり盛大に秋季例祭を催行していたようです。

時代は変わり明治、大正、昭和、平成と社会の変動が大きく変化して来ましたが農業を中心とした産業構造がそう大きく変わることはなく過ぎて来ました。しかし、先の大戦後の混乱と社会の産業構造の大変革や民主主義という大きな価値感の変貌により人々の働き方、心のありようも大きく変化して来ました。ここ五十年間くらいで三谷町でも全国の各地の状況と同じように郷土に対する想いが薄れて祭祀が軽んじられるようになりました。村や町の鎮守さまに人々が集わなくなったのです。これでは三谷町の文化である各地区の祭りとう組奉仕制度、地域の繋がりが消えてしまうのではと危機感を感じます。

もう一度、人々が賑う神社にとの思いから氏子の皆さんに感謝の心と自然を敬う心を伝えようと様々な行事、教化活動を通して少しづつ人々が戻ってくるようになりました。特に、今年のと組のみなさんが、心を一つに結んで、この秋季例祭を成し遂げようという気持ちこそ「祭りの心」であります。また、普段あまり話さない老若男女が、十六年に一回のこの祭りをきっかけに話す機会が増え、まとまることは、この地区が共に生きる活力を得て地域活性化の起爆剤になるという事でしよう。つまり、祭りをご奉仕することによつ

てここに神様が降り立たれたことを意味します。

明治天皇さまの御製をここに紹介します。

「我が国は神の末なり神まつる 昔の手振り忘るなよゆめ」と

今一度このお言葉を噛みしめながら、先人たちが続けてきた習わしをおろそかにしないで心を込めてそれぞれの役割を進めていくてくださるようお願い申し上げます。

(香川県 三谷八幡宮 宮司)

宮崎家の人々

大嘗祭当日祭にあたって

宮崎 國忠

大嘗祭当日祭の奉仕を終えてあらためて新帝陛下の御即位を皆様とともに、心からお喜び申し上げます。

本年は、御代替わりの年として特別に意味のある年であり、わたしたち国民もその意義を知って努めていかねばなりません。万世一系つまり先祖からずっと、百二十六代、御代を重ねたためたさは、わが日本の皇室をおいてほかに例がないのであります。

わたしたち国民を慈しんでいただく大御心を思い、わたしたち国民も敬愛の真心を捧げ共に栄えることを願い、皇室三千年余年の上に新たな歩みを重ねることができるのであります。

このめでたいときに、私たちそれぞれの家の系譜や歴史のことを考えてみるのもよいかと思ひます。皇室の始原は神代でありますが、天草の神主のわが宮崎家は寛永十四年十五

年に起こった天草島原の乱後の亡所となったこの地の再興からはじまります。以後代々氏子の皆さんと郷里の繁栄のために祈り、尽くしてきたのではないかと思います。

思い起こしますと、前回の御大典は、平成二年に執り行われました。今回のような御譲位によるご即位ではなく昭和天皇の崩御によって日本国民の深い悲しみの中に御即位されたのであります。

昭和の天皇陛下がご入院になったところ、前宮司つまり父は福岡に入院いたしました。崩御の悲しみは九大病院の病棟で迎えたのであります。父は誠に幸せなことに、検査による偶然の発見など二つのがん手術を行っていただき健康に復帰いたしました。平成二年四月から本殿拝殿の改築工事に入り、建築を進めておりました社殿の改築を御大典奉祝行事として納めることができました。

父は若いころ故あって郷里を離れ関西に在住して生活を営んでおりました。私も貧乏長屋といわれていた家から尼崎の小学校に通っておりまして。天草に残された祖父は体が不自由なため祖母が乳母車に乗せ介添えをしてお祭りに奉仕し、朝夕の神鼓は祖母がかわって奉仕をしたり、戦後は宮司をとなり村富岡神社の梅本千秋宮司に委ねて祭典の執行や戦後の事務処理申請作業なども行っていたそうであります。

しかし何としても父に帰郷して神勤めをしてほしいとの願いから氏子総代の方々がご相談、ご苦勞されて父を説得し、帰郷を納得せしめたという事実もあつたのであります。

その祖父義鑑も当初内田という姓であつたように、母親が離縁して内田を離れ長崎の嫁ぎ先から前夫の連れ子としてこの家に入り、育つて税関勤務の折に前妻を亡くし任地の対馬で祖母に遭遇し娶つて父を生むなど曲折を経て後継となるなど社家の継承は順調とばかりは言えないものであつたのでありますが、いずれの場合も氏子の皆さんの誠意によつて絆をつないでいただき私で十九代となる今日があるのであります。父は後継を決意すると保育園を開設し氏子の皆さんのために貢献することを選び、皆さんのお助けいただいて勤めを果たしてまいりましたが、七十年の人生の経歴の中で最も厳しい時期に前回の御代替わりはめぐつていたのであります。

慶応三年八月明治天皇御即位の年に社殿のわら吹き屋根を瓦屋根に葺き替える事業を、宮崎重一の代に実施しております。その工事の棟札には

「畏大神乃広前二恐惶白須 諸国騒立米価一俵四両大麦一両貳分其他穀類準之雖然氏子面々乞願大平和樂古来吠萱葺今後為瓦子々孫々常盤堅磐守給申」と記しています。厳しい暮らしの中ではあるが後世の子孫のためにこの事業を行うと決意し成し遂げられた当時の

人たちの心情に出会い後世の私たちは心うたれます。

経緯という言葉があります。縦糸と横糸のことです。縦軸は時間つまり先祖から子孫に至る時間軸を、横軸は今を過ごす場・空間、私と皆様の関係広く同時代を示すとすればと
その交わるところ交点に今の私たちが存在しその位置を中今とよび、連続が歴史となつて
いきます。

時代は、いくたびかの難しい問題を経過して、変わりながら大事なものを残していきま
した。

松岡正剛というひとの膨大な読書量に驚きますが、「千夜千冊」という題をつけたその
方の読書録に助けていたことがよくあります。

「日本は『面影の国』『移ろいの国』と表現しておられます。父祖の面影は、日常の営
みにも見ることが出来ます。

四季のお祭りを連綿と引き継いで奉仕される地域の皆さんに祭典後良くお話をします。
「何年か前に、何十年か前に、私によく似た神主が祝詞をあげて、いまここにあるあなた
方によく似た先祖の人々が参列してお祭りが営まれてきています。祭りを引き継いでいくことこそ最も大切なものなのです」

私たちの父祖の生き方を大事にすることが、御代替わりのこの時を迎え皇室弥栄をとものに喜ぶことにつながると思います、皇室と日本の類なき祝賀の時を、御先祖を思い子孫に心を託す機会としたいものです。

（熊本県 志岐八幡宮 宮司）

大祓詞の心

芝 幸 介

本日はようこそ椿大神社にご参拝くださいました。それではご祈祷ご奉仕を申し上げます。

本年も半年が過ぎようとしており、いよいよ残すところあと半分となりましたが、当社社をはじめ、全国各地の神社では、毎年六月三十日に、上半期の罪穢れを祓い清める「夏越の大祓式」という節目の、上半期を締めくくる大切な神事が行われております。茅の輪をくぐり、形代で体を撫でていただいて、上半期の罪や穢れを形代に移し、それを川に流すことによって、罪穢れを祓い清めて暑い夏をはじめ、下半期の息災をお祈りするという神事でございます。

神道では清らかで若々しく生命力が満ちている事を一番大切にしておりますが、どうし

でも、人は生身の体でございますので、知らず知らずのうちに、自分の意識に反して、自然発生的に「障りのある氣」というものが生じてくるわけでございますが、それを「穢れ」と呼んでおります。これは、活き活きとした生命力が減退している状態でございます、氣持ちの「氣」が枯れると書いてケガレと表すこともできます。本来あるべき姿、正常な姿ではない状態ですので、その状態が続くことによつて間違いや過ちを犯してしまいます。この状態に至った時が「罪」と言われております。体に変調をきたしたり、他の人とのトラブルが起こってしまうのも、こういった状態に陥ったことが原因ではないかと考えられます。

そこで、これらの罪や穢れを祓うために上半期の締めくくりに夏越の大祓式を行うわけでございますが、神事の中では「大祓詞」という祝詞を唱えます。大祓詞というのは、千三百年以上前から大祓式で唱えられている祝詞で、現在では全国の神社においても毎日、神様の前で奏上する、最も代表的な祝詞と言えるものでございます。

その大祓詞の中にはこういう一節があります。「荒ぶる神たちをば 神間はしに問はし賜ひ 神掃ひに掃ひ賜ひ 云々」と続いていくわけでございますが、ここにはですね、神々が犯した罪をいかにして祓い清めていくかという事が書いてあるのですが、荒ぶる神々、

これは、様々な過ちや罪を犯した神々でございますが、注目すべきは、頭からその神々を排除するわけではなく、まずは事を荒立てる理由を何度も問いただし、原因を細かく調べ、そして調べた後で祓い去るわけですが、祓い去るのは、この神々を祓い去るわけではなく、荒立てる原因となった事柄のみを祓い去るわけでございます。

「罪を憎んで人を憎まず」という言葉ではございませんが、罪を犯した人の穢れてしまった心は憎みますが、人そのものは憎まないというような表現にも似ているように、大祓詞から読み取れるメッセージとしては、過ちや罪を犯した神様を突き放すわけではなく、見放すわけではなく、どこかに許しの心というのを根底に感じることができるとかなと思います。突き放すわけではなく、最後には救いの手を差し伸べるような、なにか深い愛情のようなものを感じとる、読み取る事ができるのではないかと私は思っております。

また、この大祓詞の後半には、人が犯した罪穢れがより具体的にどのようなに祓い、取り除かれていくかという事も書いてあります。どういう事かと申しますと、罪穢れはまず、川の急流にいらっしゃる瀬織津比売という神さまが、大海原まで運んでくれます。そして、次に速開都比売という神さまがその罪穢れを全部飲み込んでくれるわけです。

さらには、氣吹戸主という神さまが、それを根国・底国にふき払ってくれるわけです。最後に速佐須良比売という神さまが、罪穢れをすっかりと流し去ってくれまして、それによつてありとあらゆる罪穢れが消えてなくなるという事が、この大祓詞の中に書かれてあります。

今登場した神様は、瀬織津比売、速開都比売、氣吹戸主、速佐須良比売という神さままで、これらを総称して「祓戸大神」という、いわゆるお祓いの神様でございますが、この話をもう少しわかりやすく説明しますと、つまりは、お祓いの神々によつてまず罪穢れが川から海へ流されます。それを海が大きな口を開けて飲み込みます。その後、地の底とも、海のかなたとも言われる世界へ運ばれまして、最後には罪穢れが、すっかりと祓い除かれて本来の正常な姿に立ち返るといふ、様々な祓えの段階を経て祓い清められていくという壮大な物語が描かれているわけでございます。

この部分に関しては、こういう風にたとえることができるのではないかと思います。泥水を飲料水に換えられる「浄水器」があります、キャンプや非常時にも役に立つものでございますが、その仕組みに似てゐるのではないかと思つております。いろんな種類のフィルターが何層にも何層にも重なつていて、泥水がいろんな種類のフィルターを通過する毎に

ろ過され、少しずつ少しずつ不純物を取り除かれていき、全てのフィルターを通過して、最終的には再び透き通った、きれいな飲める水に戻っていくという工程に近いのではないかなと個人的には思っております。

要するに、泥水というものは水に不純物が付いて濁っているだけで、水自体が腐っているわけではないので、丁寧丁寧に不純物を取り除くことによって、元通りの透明なきれいな水に戻ることができます。大祓詞においても同じように、丁寧に丁寧に「祓」を繰り返すことによっていかなる罪穢れも祓い清められるという事が書いてあり、日本においては、この「罪や穢れ」の観念のもとに、「祓」が古来より重要な儀式として厳修されてきたわけでございます。

「祓」の目的というのは、私たち本来の正常な姿に戻すことであって、排除することが目的ではありません。そこには常に見放すことはなく、深い愛情を持って受け入れてくれる心、いわゆる寛容の精神、「許しの心」というものが根底にあり、私たちは日本人として、この大祓詞を日々奏上する事によって、清く正しく明るく、そして許し合う心を自覚することができます。そうすることによって内側から清められ、毎日を心穏やかに過ごすこと

ができるのではないでしょうか。

下半期のスタートを迎えるにあたり、皆様方におかれましては、それぞれがお互いに、許し合う心、大祓詞の心を持って、一日一日を清々しく健やかに過ごしいただかれますようお祈り申し上げます。

(三重県 椿大神社 欄宜)

日本人の御霊祭りについて

新 名 紀 夫

「君が目の 恋しきからに 泊てて居て かくや恋ひむも 君が目を欲り」という和歌があります。

この和歌を作られ方は中大兄皇子です。崩御された斉明天皇（皇子の母）に向けられた歌です。

意味は「あなたにお目にかかりたいばかりに、こうしてじつと停泊してあなたと共にありますのに、これほど恋しさが募るものでしょうか。あなたにお目にかかりたくて」という意味でございます。

当時の日本は百済より援助を求められそれに斉明天皇が応じ、飛鳥より陸路で大阪まで、そして瀬戸内海を船で渡り、福岡の朝倉まで遠征してまいります。

しかしながら、斉明天皇は御年八十歳くらいだったと伝わっており、その高齢の無理が

たったのか朝倉の地で崩御されます。

そして、中大兄皇子は斉明天皇の亡骸と共に飛鳥の地へ帰っていくのです。

その帰りの停泊した所でこの和歌を作ったと言われています。

私思うに、母を亡くした悲しみそして、遠く離れた朝倉の地にて崩御された母への想い等様々な想いが詰まった和歌なのではないかと思っています。

また、当時の中大兄皇子は政権の中枢者であり、日本国の実質の最高実力者です。そのような立場の方が母の亡骸の前では一人の息子となり、母を偲び母を恋しく思う。そのような姿が日本人の家族愛そして親子の絆を表しているのではないかと思います。

そしてこれこそが、日本人の御霊に対する想いなのではないかと思っています。

この和歌が記載されている書物は『日本書紀』です。『日本書紀』は日本の正しい歴史書の位置づけもありますが、他の目的として中国を始めとする対外向けの要素もあると言われております。なぜ、そのような書物にこの場面をのせたのか。

先ほど申しました通り、どのような立場である日本人でも母を偲び母を恋しく思う。そのような姿が日本人の家族愛そして親子の絆という事を伝えたかったのでは無かったのか。

そして、これが御霊に対する日本人の姿なのだと後世の人々に伝えたかったのではないかと思います。

どうぞ、皆様方におかれましても、御霊を偲び、想いを馳せるこのことは日本人の大事なことです。これから皆様方におかれてはこの古代人が我々に示した御霊祭りを具現化し、しっかりとお祀りする。

そして、後世にもお伝えしていただきたいと思います。

(長崎県 諏訪神社 権禰宜)

陛下のお言葉

令和の御代を寿いで

村瀬佳子

初春の令月にして気淑く風和らぐ

これに続くのは梅の花のもとで歌を詠んだ万葉の和歌。新しい令和の時代がはじまりました。

御即位の日、陛下は上皇陛下がこの三十年、いかに国民のことをお考えになり過ごして来られたかを教えて下さいました。

天皇陛下の第一のお務めは、恐れ多くも私達国民の幸せをお祈り下さることです。上皇陛下の父君、昭和天皇は昭和五十年の歌会始で次のようにおよみになりました。

我が庭の宮居に祭る神々に世の平らぎをいのる朝々

それにお応えになるように、香淳皇后は

星かげのかがやく空の朝まだき君はいでます歳旦祭に

と詠まれました。国民の為に祈られる陛下のお祭りが、つつがなく斎行されますようにとの皇后陛下の祈り。あまりの有難さにただただ感動致しました。また同じ年の歌会始に上皇陛下は

神あそびの歌流るるなか告文の御声聞え来新嘗の夜

とお詠みになりました。次の天皇様として父君のお祭りに控えて居られるお姿を感じ、この和歌からも御皇室の祭祀に対する思いの深さに感動致しました。

また平成十九年の歌会始に上皇后陛下は

年ごとに月の在りどを確かむる歳旦祭に君を送りて

とお詠みになりました。香淳皇后と変わらない皇后陛下の祈りです。

今の時代ほど陛下の大御心を直接に伺える時代は無かった事でしよう。天皇陛下が皇位を継承されるのは、アマテラス大神様の時からのでめであります。

日本は、皇紀で数えれば二千六百年をゆうに超す歴史を持って居りますが、初代、神武天皇は橿原の宮で国中に暮らす全ての民が一つの家族のように暮らすという八紘一字の精神で人々をお導きになりました。

それから時を経て、およそ千三百年前、第四十代天武天皇の頃、日本は飛鳥時代と呼ば

れますが、その時すでに人々は日本固有の文化である和歌を詠み、古事記・日本書記の編纂が始まり、法律を整え、外国を意識して、一つの独立国家であろうとしていました。神社の祭りによって国をまとめられるようになるのはこの頃です。御后でもある、第四十一代持統天皇がこの天武天皇の遺志を引き継がれ、伊勢神宮の式年遷宮をおはじめになったのもこの時代です。

そして、この持統天皇の後を継がれたのはお二人のお孫様にあたる文武天皇です。文武天皇は御即位されるにあたってお言葉を伝えられました。これは宣命と呼ばれます。天皇様は三大神勅でよく知られていますが、アマテラス大神と同じ心で日本の国を治められるのですが、国を治めるにあたって、人々にどのような心がけで仕えてほしいかを伝えられたのです。

それが「明き 浄き 直き 誠の心」でした。聖武天皇は「清き 明き 正しき 直き心」とおっしゃいました。明き心とは、透き通って清らかな心。浄き心とは、綺麗で穢れのない心。直き心とは、真っ直ぐな素直な心。正しき心とは、正しい邪心のない心のことです。

最近、朝目が覚めた時、三歳の息子が私の目をじいっと見つめ

『お母さん大好きだよ お母さん大好きだよ お母さん。』

と言ってくれました。私はああ、こういうことだったのかと、心の底から魂が洗われるような気がしました。神社風に言えば魂が禊されたような気がしました。

歴代の陛下が求められたのは、幼子が母親・父親を思う穢れの無い素直な気持ちそのものだと思ったのです。生きていくうえで、これ以上に大切な徳目があるでしょうか。神様はこのようなお心がお好きです。

もう一つ、歴代の天皇様が、国民のことを公民（おおみたから）つまり宝であると考え国を治めて来られたことを忘れることは出来ません。歴代の天皇様は、決して公民（おおみたから）と呼ばれた民にのみこのような心がけで仕えよとおっしゃったではありません。今上陛下はおっしゃいました。

『歴代の天皇のなさりように心をとどめて自己研鑽に励みたいと。』

平成三十年のお誕生日会見で陛下ご自身が仰せでしたが、後奈良天皇の御宸翰について触れられました。宸翰と言うのは、天皇様の直筆の文書のことです。平成二十九年のお誕生日会見でも仰せでしたが、後奈良天皇の御宸翰の奥書にある「私は民の父母として徳を行き渡らせることができず、心を痛めている」という箇所に思いを寄せられました。同じように嵯峨天皇や御嵯峨天皇をはじめとするたくさんのお天皇様が災害や疫病の流行に胸

を痛められる様子をお伝えになりました。そしてご自身も、上皇陛下がなさったように『国民を思い、国民のために祈る。』

と仰せになりました。

戦前、天皇様は神様と崇められ、尊敬されてきました。

ですが、なにより大事なのは、それと同時に私達国民のお父様。お母様として尊敬されてきたのです。

先ほどの後奈良天皇の御宸翰にもあったように、天皇様もまた、自らは国民の父母であるとお考えだったので。

今上陛下もまた同じ大御心で天皇の御位に在られるのだと深い感動を覚えずには居られません。

いとけなき吾子の笑まひにいやされつ子らの安けき世をねがふなり

陛下が皇太子時代の平成十八年の歌会始に詠まれた歌です。愛子内親王を思われるお心そのもので私達国民を思って下さる今上陛下。これ以上有難いことがあるでしょうか。そしてその思いは国民に向けてだけでは決してないのです。陛下は皇太子時代の平成九年人みなは姿ちがへどひたごころ戦なき世をこひねがふなり

とお詠みになりました。平和を祈られるお姿もまた代々の天皇様から受け継がれて居られるのです。このようにたくいまれなる御人徳を兼ね備えられた陛下とご一緒に、令和の時代を歩める幸せをかみしめながら素直で明るいい心で、より正しく生きていきたいと思ひます。

これからとり行われる大嘗祭は天皇陛下の一世一代のお祭りです。お父様、お母様の一世一代のおまつりに、おおみたからとして、恐れ多くも子どもとして一団となつて心からお祝い申し上げたいと思ひます。

陛下とご一緒に、子ども達が幸せな世の中を創つて行きましょう。

(愛知県 長束神社 権禰宜)

神道とは

奥山剛史

私は神道とは、日々の生活の中において自分で神道というものを感じ、見つけるという事、そして日々の生活の中で先人の方々に感謝をして生きていくことだと考えています。なぜそう考えているかと言いますと、まずは日々の生活の中で神道を見つけるといいうのがどのような事かということについて話したいと思います。

私達が生活をしているこの国・日本は古事記に記されている国生みの神話のように、伊邪那岐命・伊邪那美命の二柱の神様がお創りになられたと言われています。この神様と大変繋がり深い多くの神社が日本にはあります。そこでは遥か昔から今日まで多くの人がいつも神様に祈りを捧げ生きてきました。そこには誰かが神様に祈りを捧げなければいけないと決めつけたものではないと思います。良い事があれば悪い事があつた時も人々が神様にどうか祈りをきいてほしいと自発的に考えて行動しているものだと考えています。

その姿勢はまさに神道という道を自分で探し、感じたことではないかと思えます。

また、本居宣長が生徒達から受けた質問に対して返答をしていく様子を記した『神道或問』という書物があります。ここで生徒からの質問の中に「神道とは何ですか？」というものがあります。これに対し本居宣長は「神道とは他の誰かから『これが神道だ』と教えてもらうものではない。この日々の生活の中で神道というものを見つけるものである。」と答えたそうです。つまり昔の頃からこのように考えられていたということが分かります。それでは次に感謝ということがどのようにして神道に通ずるかということについて話したいと思います。

私達が生まれる前より、当然のことではありますが日本では先人の方々が生活をしていました。その先人の方々が日々精進しながら生きてこられたからこそ、この現代の戦争のない平和な日本で私達が生活することが出来ているという事は紛れもない事実であります。また今日では医学や医療技術、パソコンや携帯電話をはじめ多くの便利な電子機器、他にも車や電車・船や飛行機などの交通機関など、本当に多くの発達・進化したものが世の中に広く普及しています。やはりこれは先人の方々が努力をして積み上げてきたもののおかげであり、感謝することであります。

ではこの先人の方々に感謝をすることと、神道がどのように繋がりがあるかと言いますと、はじめに神道では人は亡くなると大人命・刀自命というように神様になられ、お見守りをしていただくという考えがあります。つまり神様となられた先人の方々に感謝をして生きていくという事はまさに神道であると私は思います。

さて、ここまでは私が考える神道について話してきましたが、なぜこの事について話したかと言いますと、それは現代の日本において神道や神社について知らない人が多いのではないかと考えているからです。なぜかと言いますと、私は幼い頃から神社の境内に家がありそこで生活をしていました。そのため友人からいろいろな質問をされることがありました。その中には、「御経とか読めたりするの?」「いつかは君も髪を切って坊主にするの?」「将来は住職さんになるの?」などがありました。これらを聞いてみなさんが思われるように神社とお寺の違い、または神道と仏教の違いが分からない人が多いことが分かります。このようなことは、神様がお創りになられ先人の方々が今日までこの国をより平和に、より良い国にしようと頑張つてこられた日本にて、生まれてきた者としてはあまりにも残念なことなのではないかと思えます。よく最近の若者は日本について関心がない人が多いという話を耳にします。確かにその通りだと思います。私もまだまだ未熟者であり偉そうな

事を言えるような人間では決してありませんが、少しずつでも若い世代の方々に神社とは人々にとつてどのような場所であるのか、神道とは何なのかということについて本当に簡単な事から発信していく事が必要であると思います。そしてそれがまた次の世代の人々へと受け継がれていけば、より良い日本の国創りへと繋がっていくのではないのでしょうか。

神道とは人それぞれの感じ方や考え方があるはずです。皆様も神社とは、神道とはこんなものだと発信していただき、様々な年代の方に神道または神社に親しみをもつ機会を作っていただきたいと思います。

(岐阜県 伊奈波神社 権瀬宜)

神葬祭（一年祭と納骨）を終えて

稲葉政信

（場面設定）

日蓮宗の総本山身延山久遠寺の地元で仏教ではなく神道を選択頂き、お墓造成の都合で納骨を一年祭のタイミングで行う。その直会の席においての講話。元号が変わり、令和の御代となったので、皇室の文化にも触れる。

（講話）

本日は、雨天お足元が悪い中、小林カオル刀自命の納骨祭、墓前祭、一年祭にご参列頂きましてありがとうございます。今日の講話での主人公は勿論、亡くなられた小林カオルさんですが、もう御一方、奥様にも焦点を当てていますので、話がどのように展開していくか、暫し耳を傾けて下さい。

小林カオルさんは、一年前の今日葬儀を行い、小林カオル刀自命という神様となりました。その生前のお姿は、葬儀の時に使った偲詞という祝詞に全て書かれており、本日もその一部を引用させて頂きましたので、小林カオルさんが生まれてから亡くなるまでのお姿が、皆様の頭の中に思い出された事と思います。

一年前の葬儀の折にもお話致しましたが、神道では神の計らいに依り、神代の世界から生を受け、いずれまた神代の世界に帰っていくとお話しました。人は生を受けると住んでいる地元の神様に生まれた事を奉告（お宮参り）します。そして、亡くなった時は、神様に亡くなった事を奉告（帰幽奉告）します。人間の魂は亡くなった直後は荒魂といって荒々しい不安定な魂となっております。そしてその魂は徐々に和やかな優しい安定した魂となりちようど一年を一つの区切りとして和魂になり、小林家の守り神として相応しい魂、小林カオル刀自命となります。そしてこの先、三年、五年、十年、二十年、三十年と先祖供養（御霊祭り）をご親族の方々が気持ちを含めて行う事により、小林カオル刀自命の霊力が更に高まり、小林家の守り神として力を増していきます。

また、通常は亡くなってから五十日で忌が明けると神社神道では定義しているので、それまでに納骨を済ませるのが通例ですが、小林家におかれましては諸事情で納骨を本日行

いましたので、本来忌は明けているのですが、最初の納骨祭では忍手で神事を行い、納骨後の一年祭に際しての墓前祭では柏手に変えたのを皆様お気づき頂けたでしょうか。小林家、この身延という仏教の町で、お墓・信仰の選択肢はお寺（仏教）も勿論考えたと思います。しかしながら、元々神社神道である稲葉家から出た稲葉寛大人命、その奥様はな刀自命、そしてその御子息である、稲葉計二叔父さんの影響もあった事と思いますが、神社神道での葬儀そしてお墓を選択して頂きました。私も、この神道墓地の少ない身延という地で非常に神道教化は難しいのですが、改めてその選択を頂いた事に対し身の引き締る思いで、改めて神の道に精進しなければと心を新たにしました所であります。

さて、先ほど忌明け（忌慎む期間）が五十日であるとお話しました。これは、故人の祀りに専念する期間であり、この期間は故人の幽世でのご冥福をお祈りします。これに対し服の期間または喪の期間は一年であり、この期間は故人に対する哀悼の気持ちを捧げます。また、この喪明けの一年間は、世代交代の準備期間とも言えます。この考え方は、神社神道の根幹である皇室の文化にあります。皇室では、天皇がお亡くなりなる（崩御される）または、皇位を譲渡・生前退位される（御譲位される）と、即日「元号」が改正され、天皇家で代々継承してきた三種の神器の承継「剣璽等承継の儀」が執り行われ（皇位が継承

され)、ある一定の期間を経てから天皇が皇位についたことを内外に広く知らす「即位の礼」が行われます。この二つにより、法的・政治的には、天皇は即位を完了しておりますが、天皇が即位されてから初めて行う新嘗祭（大嘗祭）をもって晴れて天皇の即位が完了するとされています。令和の御代替わりは生前退位であり、皇位継承（世代交代）の準備期間が十分にありましたので、今年の十月には即位の礼が、十一月には大嘗祭となります。さて、小林家を預かる、または切り盛りする立場となられた奥様、この一年間の中で、改めて小林カオル刀自命が生前なされていた事に気がつかれた事がたくさんあるのではないのでしょうか。そして自問自答をし、小林家を奥様として切り盛りするにはどうあるべきか、どうなるべきか、そんな一年ではなかったでしょうか。本日、喪明け（世代交代の準備期間）を終え、本当の意味で小林家を預かる身となられた奥様、この一年間は今まで以上にご苦労があった事と思います。しかし、本日の立ち振る舞いを拝見し、十分に小林家の奥様として世代交代がなされたと思うのではないのでしょうか。

また、本日は台風接近で悪天、そしてお墓を作る為の地鎮祭も台風で順延、これらもまた見方を変えれば、人生思い通りには行かない、順調が全てではない、急いては事を仕損じる、人は自然の中で生かされているとも言えます。そして、この恵の雨によって清めら

れ、明日には台風一過で清々しい青空へと変わります。これも神の計らい、小林カオル刀自命が納骨を済ませた本日までが本当の意味での喪に服す期間、明日からが喪明け、「世代交代も済んだのでゆつくりとやるんだよ」と言っているのではないのでしょうか。

最後に、小林カオル刀自命のご冥福をお祈り申し上げますと共に、本日ご参加の皆様のご多幸を祈念致しまして、小林カオル刀自命の納骨祭、墓前祭、一年祭を終えての齋主としての挨拶に代えさせていただきます。

（山梨県 一宮・賀茂神社 宮司）

令和の御代替わりと

神社のおまつり

塩 崎 昇

参議院選挙が公示になり、いよいよ選挙戦がスタート、この研修大会の最中にも選挙戦は繰り広げられています。私たちが推薦しております有村治子が見事当選されんことをお祈りいたします。

政治の「政」の一字は、マツリゴトとも読みます。神さまをお祭りする、マツリと同じ読みであり、意味も実は同じなのです。政治を司る者が、神恩を感謝し、神さまをお祭りするがごとく、明き直き、正しき真心をもって徳のある政治を行う。国の隆昌と世界の共存共栄に寄与し、そして五穀が豊かに稔り、産業の発展と、子孫の繁栄に繋がる慈しみのある政治が行われなければなりません。天皇が国を治め、政治の中心にいらした頃に、この精神が打ち立てられました。

さて、五月一日に新天皇が即位され、令和の御代となりました。当社でも五月一日の月

次祭にあわせて「踐祚改元奉告祭」を執り行いました。

神社のお祭りでは必ず祝詞のなかで次の詞を奏上いたします、

天皇の大御代を手長の御代の厳御代と

堅磐に常磐に斎い奉り幸はへ奉り給ひ

とお祈り申し上げます。

つまり、天皇陛下のご健康とご長寿、そして在位される御代が泰平で揺るぎないことを神さまにお祈りしているわけです。

一方、宮中には宮中三殿という神殿があり、皇祖天照大御神をはじめ、歴代天皇のお御霊、そして八百万の神々がおまつりされております。特に重要な儀式である新嘗祭は十一月二十三日の夕べと二十四日の暁の二度、天皇陛下が御親らご奉仕され、神恩を感謝し、国の安泰と国民生活の安寧をお祈り下さいます。天皇陛下親らが種をまき、育て収穫したお米をはじめ様々な神饌を神々にお供えになって、八度拝という立ち上がりは伏せて、また立ち上がりは伏せての拝礼を繰り返され、神々にお告げ文を奏上されます。そしてその後、陛下自身も神饌をお召し上がりになり、神々から新たなお力を頂くわけであります。

私たち神社のお祭りは、国民が天皇陛下を敬い慕^{した}う祈りを神々に捧げて、宮中では、天皇陛下が国民に対し深い慈しみをもって安寧をお祈り下さる。国民と天皇陛下、お互いの祈りは互いに呼応するように営まれているのです。

御歴代の天皇は、この宮中祭祀を大変重んじられました、昭和天皇もその大御心を継がれ、新嘗祭のご奉仕を大切になされたそうです。昭和天皇は晩年、ご高齢で 侍従らがお止めするのをお聞き届けにならず、神嘉殿の奥でただ御一人、神々にお仕えされました。そのお姿は誰も拝することはできませんが、漏れ伺ったところによりますと、拝礼の際に、よろめき、たたらを踏んでまでも拝礼なされる音が御殿奥からいつまでも いつまでも 外に響いて聞こえていたそうです。

上皇陛下におかれても、ご負担軽減が叫ばれる中にあっても、決して宮中祭祀をおろそかにされることはありませんでした。むしろ御譲位のお気持ちには、宮中祭祀を万全にとりおこなうためにも必要であつたとの大御心ではなかったと拝察する次第であります。

いよいよ御即位後最初の新嘗祭にあたる大嘗祭が十一月十四日の夕べから十五日未明まで行われます。

歴代天皇の手振りのまま、新天皇が神々に供物を捧げ、親らもそれらを食し上がられ、天皇として平安な御代を築くことに努力し、国民の安寧のためひたすらに祈りを捧げることをお誓いされるのです。天皇陛下の慈愛に満ちた「国安けれ、民安けれ」の大御心は、まさにこの祈りの体現であると言えるでしょう。

歴代の天皇がお継ぎになっている神まつりについてのお気持ちを明治天皇が御製に込められています

わが国は 神のすえなり 神まつる

昔の手ぶり 忘るなよゆめ

とこしへに 国まもります 天地の

神のまつりを おろそかにすな

天皇陛下は上皇陛下や歴代天皇がなされた神まつりを受け継がれ、令和の御代にそのおつとめを果たされます。私たち国民も氏神さまや、ご先祖さまを大切に、まつりで受

け継がれた 神恩感謝の心と 天皇陛下のいらっしゃる日本国の安泰 私たちの生活が豊
かで安寧であること そしてその祈りが込められた伝統行事や文化、芸能をしつかりと
子々孫々に受け継いでまいりましょう。

（和歌山県 伊勢部柿本神社 宮司）

靖國神社御創立百五十年を迎えて

小 國 紘 平

皆様方、ようこそ靖國神社に御参拝くださいました。

本日は、まず靖國神社の由緒からお話をさせていただきます。靖國神社は明治二年六月二十九日に、明治天皇の思召しにより東京招魂社として創建され、戊辰の役に国事で戦没された三千五百八十八柱の英霊がお祀りされたのが始まりです。明治七年一月二十七日に明治天皇が初めて東京招魂社へ御親拝の折にお詠みになられた

「我國の 為をつくせる 人々の 名もむさし野に とむる玉かき」

の御製からも知ることができるよう、祖国の為に尊い命を捧げられた方々の御霊を慰め、その事績を後世に伝える為に創建された御社です。東京招魂社から現在の靖國神社へと改

称されたのは明治十二年のことで、明治天皇が命名された「靖國」という社号は「国を靖（安）んずる」という意味であり「平和な国家を建設する」という願いが込められております。

次に御祭神についてお話をさせていただきます。靖國神社の御祭神は御承知の通り、国の為、愛する家族の為に一命を捧げられた方ばかりです。その御祭神は軍人が大多数を占めておりますが、中には国の命により学童疎開をしていた際に命を絶たれた児童、電話交換手や従軍看護婦等の女性の方も五万七千柱御祭神としてお祀りされています。このように、身分・職業・年齢・性別等に関わりなく等しく御祭神としてお祀りされております。幕末、明治、大正、昭和と激動の時代を歩み、避けることのできなかった多くの国難に命を捧げられた御祭神は、現在二百四十六万六千余柱を数えます。

靖國神社では多くの方々に、祖国の為に尊い一命を捧げられた英霊の御心に触れていたかどうかと、英霊の遺書や書簡を毎月、社頭に掲示しています。本日は、僅か二十六歳で戦死された御祭神の遺書を紹介させていただきます。

（前略）

お母様、かうして懐かしい御名をお呼びするのも幾度もないでせう。でもお母様、決し

て悲しんではなりません。久夫は立派な軍人です。母上は、此の久夫のお母様です。

(中略)

望み叶って、あの靖國の御社に赴けますならば、香り高く咲きにはふ九段の桜の下でお母さんの訪れを待つてゐます。何一つとして御手助けもする事を得ず、去り逝く久夫をお許し下さい。久夫は勇ましく華と散り逝く覚悟です。久夫、死の報あつても決して悲しんではいけません。泣いては兵の母として何よりの辱です。白木の箱が届いたら、唯一言「久夫よくやった」と莞爾とほめてやってください。お母様が育てた鼻たれ坊が晴れてお役に立つときが訪れたのです。久夫はそれを頼りに喜んで靖國の宮に迎へられます。

(中略)

ではお母様、末永く御幸福であつて下さい。久夫は常にお祈りしてゐます。

(後略)

祖国に命を捧げられた方々の大半は若者です。そして多くの御祭神は、最後の手紙を愛する家族、特に母親に向けて残されています。御遺族の中には、このように若く独身で散華された我が子の為、また兄弟の為にと願いと祈りを込めて手紙と花嫁人形を奉納されま

す。本日はその手紙も紹介させていただきます。

武一よ貴男は本当に偉かった。二十三歳の若さで家を出て征く時、今度会う時は靖國神社へきて下さいと雄々しく笑って征った貴男だった。どんなにきびしい苦しい戦いであったろうか。沖繩の激戦で逝ってしまった貴男。年老いたこの母には今も二十三歳のままの貴男の面影しかありません。日本男児と産れ、妻も娶らず逝ってしまった貴男を想うと涙新たに胸がつまります。今日ここに日本一美しい花嫁の桜子さんを貴男に捧げます。私も八十四歳になりましたので、元気で居りましたなら又逢いに来ますよ。どうか安らかに眠ってください。有りがとう。

国全体が奉祝の空気に包まれて令和を迎えた今年、靖國神社は御創建百五十年を迎えました。この百五十年の間に、連合軍の占領政策で靖國神社は国家による保護の絆を断ち切れ、その年を境として、御創建からの七十八年とそれ以降の七十二年とは神社の性格は大きく変わりましたが、その本質は殆ど変わっておりません。

日本人は先祖の御霊を神として祀り、子孫を見守ってくれると信じ、今でも祖先の御霊

が「守り神」として大切にされているのは、伝統的な考えが神道の信仰と共に受け継がれているからです。それと同様に、国家に大切な働きをした死者の御霊も「守り神」と考え大切にしてきました。靖國神社や全国の護國神社は、そうした日本の文化そのものであります。

私の先祖にも御祭神として祀られている方、遠州報国隊の参加者、招魂社時代の神主もおりますが、恥ずかしながら靖國神社への奉職を考えるまで知らないことでした。先の大戦が終結して七十年以上の長い歳月が流れ、殆どの人が戦後生まれの今の時代では、戦争の記憶が薄れてしまっているのが現実です。しかし、当時の日本人がどのような思いで戦ったのかを知ることが、平和の有難さを考える上で非常に大切なことです。靖國神社はこの平和な日本に住んでいる全ての日本人に御縁があり、この日本という国を残された先人の魂に触れることのできる場所です。私たちは常に、今日の平和は御英霊の方々の御蔭であるという感謝の心を忘れないことが大切です。

お帰りになられました後、お子様やご友人等、身近な人に靖國神社のお話を伝えていただき、皆様に御祭神の御心に触れ、日本人として日本に生まれて良かったという愛国心を涵養していただければ幸いです。

（東京都 神社本庁 事務研修員）

令和と神社　　神社からのお茶

江崎 視佳

新しい元号が四月一日に「令和」と発表され皇太子さまが五月一日に天皇にご即位あそばされ新しい御代が始まりました。

この令和の大典は国書「万葉集」から、大宰府赴任中の大伴旅人が梅花の宴を催した一文にございます。

梅の花は古来からかぐわしい香りと清楚な美しさで人々の心を癒してくれたことでしょう。

また和歌を通して交流するさまはなんと素晴らしい生命の交歓でございましたか。

梅花は令和の御代を支えるシンボルになることでしょう。

ところで梅花は神社の境内によく似合います。

私の奉仕する神社では十年ほど前から梅花咲く頃にお茶の野点の奉納がごさいます。

きっかけは氏子さんでお茶の先生が、「神様のおかげで今こうして幸せに暮らしていますので、ご恩返しにお茶をたてて差し上げたい」とのことでした。

寒い二月の野点を案じますが、天気予報を参考に現在も開催日を決めさせていただいています。

前日からお道具が運ばれ、当日は早朝よりお茶の先生の社中の方々がお着物を召されお集まりいただき、ありがたい限りです。

茶道具を組み立て水屋の準備も整いお湯も適温に沸いていよいよ野点の始まりです。

ご近所のご婦人がお友達を誘ってきてくださいました。

緋毛せんの上に座られますとお点前を拝見。お社中のお方より「お菓子をどうぞ」とお干菓子配られます。

ご婦人方が「まあお鈴。先ほど鈴を振ってお参りしてきたところです」とよろこんでくださいました。

しばらくしますと介護施設の通所者のグループ一行さまがケアの方々に手を借り車から降りてくれました。

童心に返ったように「今日は梅の花がとってもきれい！お茶は女学生のころ友達とお稽古に行ってたよ！なつかしいありがとう！」ニッコリ笑顔がこぼれます。

男性の方は「みんなでいただくとお抹茶はうまかね」と好評です。

午後からは幼稚園の先生を先頭に園児たちは列を乱さずにお友達と手をつないでやっけます。

お抹茶がひとりひとりに運ばれますと園児たちは恐る恐るお茶碗の内を見て「うわーっきれいな色やね！あわは、ふうふう？どうしようか？」

「飲んでみらんとわからんね」・・・。

お抹茶をたてるシャカシャカの音に興味津々、そのうち自分でやってみたいという元気のいい男の子がいて、お茶の先生が、一緒にしましょうと手を添えてお教えくださいました。

見事にお抹茶がたちみんなで「すごいね！」と拍手が上がります。

園児たちがやってくると、いつも境内は大にぎわいです。

野点傘の柄に短冊が掲げてあります。今回そこには「春風花自開」（春風に花 おのずから開く）の禅語がありました。

梅の花の香り漂う中、大きく深呼吸をしました。

地域の皆さんのとの一期一会の出会いに感謝のひとときです。

これもひとえに皆さまのおかげです。神様もさぞかしおよろこびでしょう。

（福岡県 熊野神社 禰宜）

この国の民度

鈴木明子

「とんとんとん。」

夕食の準備で台所に立つ私の耳に、それは突然飛び込んで来ました。

「誇りと喜びを持つことができるこの国で、象徴としての務めを果たす事が出来たのは、この国の民度のおかげです。」

上皇様のお声でした。私は鳥肌がたちました。上皇様が私たちのおかげと仰せになっておられる？私はすぐテレビの前に駆け付けました。

平成三十年の記念式典でのお言葉が報道されていたのです。

「誇りと喜びとを持つことのできる国」

「この国の民度のおかげ」

上皇様にそのように思っていただけなんて…と感動で涙が出そうでした。

上皇様が仰せになられた「この国の民度」とは、過去の歴史をさかのぼって考えてみますと、

籠もよ　み籠もち　掘串もよ　み掘串持ち

この丘に菜摘ます児

家聞かな　名告らさね

と朗々と菜を摘んでいる乙女に声をかける雄略天皇の歌から始まる万葉集があります。「国家の品格」を書いた数学者の藤原正彦氏によれば、奈良時代の八世紀、世界のどこにもあのような素晴らしい歌集は無いそうです。貧しい名もない人や防人達までが心を打つ歌を詠んでいます。

言霊の力を信じ、目に見えないものに祈る深い感受性、精神性はこの国の民度を形造っていると思われます。

さて皆さん、戦前（大正九年、一九二〇から一九二二）日本がシベリアに抑留されているポーランド人の孤児達を救った話はご存じでしょうか。

元駐ポーランド、ベルギー大使の兵藤長雄氏（女性月刊誌、ハートストーリーイ七月号）によりますと、ロシアからの独立を目指して運動を起こしたポーランドの人々は、捉えら

れ家族もろともシベリアに流され、殺されたり食料も与えられず、栄養失調でどんどん死んでいったそうです。危機感を募らせた母親達は、せめて子供達だけは母国ポーランドに帰してやりたいと、米国や西欧に助けを求めたそうです。しかし各国はロシアに遠慮して動かない。万策尽きた母親達「肌の色は違うけど日本に泣きつくしかない」と外務省の扉をたたいたそうです。日本の決定は早く、すぐ動いたそうで、シベリアにいる陸軍にも全面的に協力させ、二週間後には五十六人のシベリア孤児が敦賀に到着。洋服が無いので和服に着替えさせ保護。日本国内でも大変なニュースとなり、全国から慰問品や寄付金が届いたそうです。歯医者さんは無料で治療してやり、散髪屋さんも無料で散髪、大学生はポーランドの音楽を勉強して、子供達に聞かせる、婦人会は、慰安のための行事をしたりして、手厚く世話をしたそうです。貞明皇后様も訪ねられたそうです。計八回で七六五名、栄養失調や病気を治して、日本の船でポーランドへ戻してやったそうです。帰る時、子供達は嫌がったそうです。日本のお母さん達は衣類やおもちゃなどいっぱいのお贈り物を持たせたそうです。船の中では、夜になると船長さんが見回ってくれ、熱が無いが額に手を当てたり、頭を撫でてくれたりして、その時の船長さんの荒れた手を印象深く覚えていきますと、かつてシベリア孤児だった何人もの方が、おっしゃっていたそうです。

六十年後、そのうちの一人の方が日本へ。どうしても生きているうちに仲間を代表してお礼を言いたかったと話し、感極まると「うさぎとかめ」を歌ったそうです。

その後ソ連が崩壊するまでその事は誰にも話されず、更に二十年の月日が流れ、一九九一年（平成三年）ソ連が崩壊して真の独立を果たした後、兵藤さんはその話を聞いて、孤児探しを始めたそうです。大半は亡くなっており、存命でも半数以上は動けず、八名の元シベリア孤児を日本大使館に招いたそうです。

皆さんは「這ってでも来たかった。自分達が世話になった日本にもう一度お礼を言いたかった。」と、全員が泣き崩れたそうです。

そして、全員が大事にしていた物をもって来られた。日本のお母さんからもらった子供の帽子を肌身離さず持つておられる方、死んだ時お棺に入れてもらおうと言って扇子を持つておられる方、ボロボロになった聖母マリア像のお札を持つておられる方、そこにはうつすらと日本の教会の名前が見えたそうです。

最後に皆が覚えていたという「うさぎとかめ」を歌ってくれ、それを聞いて兵藤さんは、涙が止まらなかったそうです。

一九九五年一月十七日の阪神淡路大震災のとき、恩返しをする時だと絵を寄贈したり、

演奏会を開いてくれたり、震災孤児三十名をポーランドに三週間も招待、シベリア孤児だった四人とも対面。

あなた方のおじいさんやひいおじいさんにいかに世話になったかを泣きながら話したそうです。

上皇、上皇后様がポーランドに來られた時も対面。

今こそこういう日本の民度を思い出し、取り戻していく必要があるのではないのでしょうか。

(滋賀県 立木神社 権禰宜)

佐嘉神社について

落 合 洲 造

佐嘉神社、佐嘉神社の御祭神についてお話させていただきます。まず、佐賀の地名の由来からお話させていただきます。

佐賀の由来は諸説ありますが、「肥前国風土記」によりますと、日本武尊が各地を巡幸しておられた時にこの佐賀の地に来られました。楠の生い茂る様をご覧になり、「この国は榮（さか）の国と呼ぶがよからう」とおっしゃいました。そこから榮郡と呼ばれるようになり改めて佐嘉郡と呼ばれるようになりました。この佐賀県を中心佐賀市に御鎮座するのが佐嘉神社であります。

佐嘉神社の御祭神は、佐賀十代藩主鍋島直正公、第十一代藩主鍋島直大公をお祀りしております。昭和天皇様が、直正公の数々の御事績を賞し、昭和四年十月十九日に別格官幣社佐嘉神社御創建を仰せ出され、直ちに御造営に着手、昭和八年九月十七日別格官幣社に

御列格されました。

別格官幣社は、全国に二十八社あり、国家のために特別な功労があつた人物がお祀りされております。

御祭神鍋島直正公は、文化十一年に江戸の桜田藩邸に於いてお生まれになりました。今から二百年ちよつと前です。その後、天保元年、若千十七歳で佐賀藩の藩主となりました。当時佐賀藩は、長崎警備の大任を受け持ち、財政は極度に窮乏していました。

初めてお国入りする事となり、行列を仕立てた一行は江戸を出発し、品川の宿で休憩をとりますが、なかなか出立しなかつたといひます。若き藩主直正公は側近に事情を尋ねますが、なかなか事情を知らせない。実は、参勤交代で江戸在勤中の藩士たちにお給金が支払われてなかつたそうで、藩士たちは、日常の生活必需品をいわゆる「お通い張」で買っていたそうです。ですから、お国入りとなれば当然江戸の商人たちは支払いを要求し、そのために行列が動かなかつたという逸話が残っているくらいです。

佐賀に帰国後は財政を立て直すためにあらゆる施策を講じました。農地拡張のための開拓、有明海の干満海質等を考え広大な干拓事業に取り組み、農地は米作収穫の後に麦作、田園の畦には大豆を植え、河川の堤防には蠟燭の原料となる黄櫨を植えました。自らの着

衣もすべて綿に改め、食事は一汁一菜を励行し、遊郭の閉鎖等、徹底した儉約令を施行し、日本の特産物、有田の磁器、海産物の輸出につとめ、一代で雄藩に改変させました。

直正公は、藩政が整い豊かになった財を元に国防の強化に力をそそぎます。国防の強化に力をそそぐきっかけとなったであろう事件が過去にありました。フェートン号事件です。

当時、日本は鎖国中でありましたが、日本の中で唯一長崎の一港のみ、オランダと中国との交易をゆるしていました。その一カ所のみがオランダ、中国の文明を密かに知ることができる窓口でありました。当時は医学といえばオランダ医学を指し、最も優れた医学の国であったと言われております。また、中国も野生の草木から製薬をしていました。今で言う漢方の原点であったということで、医学を志す物は、われ先にと長崎に訪れたようです。

そういった有利な面もありますが、全国で一カ所外国に対して開港していた港を警備するという重大な責任を負っていたのが、佐賀福岡両藩でした。何一つ問題のない平穏な状況が続きましたが、事件が起きます。フェートン号事件です。

ある日、平穏な長崎港にオランダの国旗を掲げた軍艦が入ってきました。警備は当時佐賀藩でありましたが、オランダの国旗をみても何の不思議も感じませんでした。その船は

オランダの船ではなくイギリスの船でした。イギリスの船はオランダ人二名を拉致し、薪炭、食料、水などを求め、さらには暴力の限りを尽くして去っていききました。警備には常時千名で警備にあたることになっていましたが、この時は、十分の一の百名しかおりませんでした。平穩が続いた長崎港の状態であつたため、心の緩みから、警備員を百名に減らしていたことなどが重大な責任とされ、長崎奉行をはじめ、藩士数人が切腹となりました。また当時の佐賀九代藩主鍋島齐直には謹慎処分が下され、百日間の閉門により城下町は静まりかえつたといひます。こういった屈辱的賠償と責任は当然後に活かしてゆかなければなりません。

日本は四面を海に囲まれており、当時既にアメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、ロシア等の国々は開国を求めて近海を遊弋していました。また、オランダ、中国を通して、諸国との文明の遅れ、差を知り、国防の重要性を痛切に感じ、藩政が整い豊かになってきた財を、国防、文化、文明、科学、医学等に力を注ぎました。

直正公は日本国内で最も世界情勢に通じていた藩主であり、欧米列強の砲艦外交に対抗するための方策として、追求したのが防衛力（軍事力）の強化でした。

国の防備を強固にするには、強力な大砲が必要になるため、直正公は殊の外窮理学（物

理学）に力をいれ、反射炉を築き、日本で最初の鉄製大砲の鑄造に成功しました。

ペリーが来航すると、幕府は江戸湾防備のため品川に台場を新設し、大砲を佐賀藩に注文をした程でした。また他にも、世界で最高の技術を要するアームストロング砲を鑄造することに成功しました。

日本で最も早く鉄製大砲の鑄造に成功し、近代化政策により佐賀藩の軍事力、科学技術力は群を抜いていました。

当時倒幕のため、薩長からの働きかけにも、幕府からの援助申し入れにも応じず「我が藩の砲は、日本人が日本人を殺傷するために作ったのではない、外国から日本を守るためだ」とひたすら中立を守っていました。

他にも早くから近代海軍の整備にも取り組み、日本で最初の実用蒸気船「凌風丸」の建設をはじめ、蒸気車、電信機の制作にも力を注ぎました。

明治になり、版籍奉還の際には、政府に現金七十一万両（明治初年に遡り換算すると約六千億円）、軍艦十二隻を献納されました。これにより日本の国が動き始め近代国家への歩みを推し進め今日の文化文明の原点となすものと言えます。

明治四年に直正公が五十八歳で薨去されると、明治天皇様は、直正公の薨去を痛み侍従

を遣わされ弔辞（勅語）を賜りました。その文中に「国家の柱石、臣庶の儀型」とあり、直正公の御事績が、すべて国家的御鴻業であつたことを伺い知ることができます。直正公の御鴻業の数々から、佐賀県内はもとより、県外の多くの人々から厚い崇敬をうけています。

（佐賀県 佐嘉神社 権禰宜）

機関紙の発行について

住 吉 紀 子

機関紙を出すようになったのは大麻頒布の時でした。総代さんがどうしても配れないという事で私が五十体程自転車で見ながら訪問しました。すると「どこから来たのですか。そんなものいりません。」と、まるで押し売りのごとく簡単に断われ気が落ち込む事もありましたが「わざわざ宮司さんが来てくれて」と、とても喜んでもらったとしても二日間まわりました。その地域は自治会もまとまりなく、総代さんも度々代わり神社の場所も知らない人も多く、御神札についても説明しながらでした。大麻頒布では地域の総代さんに氏子さんの世帯数に頒布してもらっています。総代さんの苦勞もよくわかりました。又、神社の近くの小学校の子供たちが先生が引率して地域の社会見学で年に二回訪問され、熱心に神社の事について質問されます。神社ではどんなお祭りが、神主さんは何をしているのか、どんな神様がいて、神社はいつ頃からできたのかと興味深く質問さ

れ、後程参加したほとんどの子供達からお礼の暑中見舞の葉書をもらいました。私は大変励まされ、少しでも神社の事がわかってもらえたのかと思います。

内容としては、神社での出事、もう三十年ばかり以前ですが、父が境内の古い井戸に落ちた子供を助け上げ、その本人とお参りに来られた時、偶然にお会いして「今日まで元気であるのも宮司さんのお陰です」と、神社ではいろいろな出会いがあります。又、あるご婦人は、なつかしようにこの境内でお葬式に参加した事があり、三十年ばかり前の事です。学校の先生が急に亡くなられ子供と先生方大勢で社務所で行われ、涙々のお別れだったそうです。この様なさまざまな出会いがある事を伝えて氏子の皆様に知ってもらい、よりつながりができると思います。「宮司のつぶやき」の欄を設け、社会の情況、「人口減少、高齢社会、子供のネット依存症」、今話題になっている事を提供して考えてもらいたいとも思っております。はやぶさ二号がリューグウに着陸したことも載せました。このコーナーは呼んでおもしろいと反響があります。昔から住んでいる所には必ず神社があります。社会が多様化して人とかかわりが少なくなり、以前より参拝者が減っていますが、現在いろいろな不安や悩みがあり「苦しい時の神だのみ」で若い人のお参りも増えています。昭和、平成、令和と時代も変わり、まわりの環境も変わり、神社も変わってきます。祝詞の

内容でよくいわれております不易と流行の調和をとっていく事が大切ですが、神社においてもそれは大切だと思います。日本は世界から見ると、ほんとうに小さい国ですが、美しい国でもあります。その歴史は神の国、神社の存在から成されたもので私たち神職の役割が大きく「神のみこと持ち」として励まなければと思います。「海の日」もすぎ「海は広いな大きな」の歌は夏になると親しまれ、子供の頃海に行くと歌いたくなり単純ながらも奥深い歌です。自然災害も考えながら海は大切にしたいものです。

(香川県 八坂神社 宮司)

「二つの足あと」と

小さな楽しみ

木下久榮

「二つの足あと」という小話をもとにして神様について考えてみたいと思います。

ふり返ると、二つの足あとがあった。一つは自分の足あと、もう一つは「いつもあなたと一緒に歩く」と約束して下さった神様の足あと、しかし自分が一番辛くて苦しかった時の足あとは、一つしかありませんでした。

「どうしてわたしが一番辛い時、わたしのそばにいて下さらなかったのですか。」と尋ねると、神様は「わたしはいつもあなたと共にいた。その足あとが一つしかないのは、わたしがあなたを背負って歩き、あなたを支えていたからだ。」とおっしゃいました。

わたし達は特別のお願いがある時は一生懸命にお願いし、願事が叶うと心から感謝いたしますが、普段は神様に守られ、お加護を戴いている事にも気づかず、感謝することなど忘れてあたかも自分一人で生きているように錯覚している人がいることに気づかされ、神

様の存在や神様とわたし達の関わりが、いかに大きく、大事なものかを知っていたただかなければならないと強く感じました。わたし達は常に目に見えない不思議で偉大なお力をお持ちの方に守られている事を知っている人はその方を神様とお呼びして崇めています。

ある女性の作詞家が、「日本人はもっと神様に甘えていい。」といわれたのを思い出しながら、「二つの足あと」という小話のもつ意味は神様を畏れ敬い、祈り、お加護に感謝するということ大切な心を忘れている日本人への戒めのように感じました。

まず朝、無事に目覚めた事に感謝し、一日の平安を祈りながら起き、夜は一日の無事に感謝し、明日の幸せを願いながら、床に着くような習慣を身につけることが信仰心の第一歩だと思います。勿論起きて身なりを整えたら、やり方は違っても、お水やお茶、初穂、御飯などを神様やご先祖様にお供えして、一日の平安を祈り、夜は無事に過ごす事ができたそのお加護に感謝のお参りをされる御家庭も多いと思いますが、その事をずっと続けていかれ、子や孫の世代に継承され、実践できるように家庭祭祀のあり方を重視していただきたいと思います。科学万能主義の教育を受けた世代には目に見えない神様の存在や神祕の世界の事などすんなりと受け入れ難いのかも知れませんが、「神あり」と思う心を育て、神様は目に見えないけれども不思議で大きな力を持つておられ、私達は神様のお加護

によって生かされており、さらに神様と仲良くすると信頼関係が深まり、多くのお加護を頂けるという強い信仰心を育てなければなりません。

私は車のお祓いに来られた方には、神様が車に乗っていて下さるので、車に乗られるときは無事を祈り、無事に着いたらお礼を申し上げて、神様との絆を深めて下さいと申します。車に乗る人は神様を信じて安心して乗り、注意して運転するので、きっとスムーズな運転ができること請け合いです。

神様は見抜き見通しと申します。信仰心のある人は神様の御心に恥じるような行いはしないのではないのでしょうか。世の中は因果応報、自分がやった事はブーメランの様に自分に返ると申しますので、自己反省するようになり、信仰心のある人がふえると、いびつな社会は解消され希薄な人間関係も是正されて住みよい、穏やかな世の中になる事でしよう。話は変わりますが、今高齢化社会で一人暮らしの老人が多くいますが、現在の世の中は老人にとって危険が多く、恐怖や不安、心細さにさいなまれ、その上孤独で寂しさにも耐えています。ある女流作家の方が年をとったら、毎日楽しくばら色の日々であるように心がけて生活した方がいいとおっしゃっていましたが、年をとると刺激や変化が少ないので、夢や希望、楽しみなどを根底にもっているとその小さな幸せが心の支えになつて元気にな

るように思います。私の朝の楽しみは、神様や先祖へのお供えのお茶初穂をとってから自分の分を少し残しておき、その日の気分に合わせてお湯呑を選び、残しておいたお茶をお湯呑にそそぐと美しい緑色が小さく広がります。その美しさを眺めながらお茶を頂くのが何ともいえない至福のひとつです。次にカーテンを開けると庭が広がります。手入れが行届いていませんが春先は梅の花が開き始めたとか、椿の葉かげに蕾や花を見つけては喜び、その時々で表情で心を和ませ楽しませてくれます。また名もない草が可愛い花をつけていることに感動して、声をかけたりすると孤独や寂しさは豊かな心へと変っていきます。

信仰心を持ち、神様に守られているという安心感をもって、神様はじめいろんなことに感謝しながらまわりとの調和を大事にして、小さな楽しみを支えにしていると、一人暮らしも穏やかに過ごしていく事ができるように思います。

(熊本県 大江八幡宮 宮司)

沖繩と神社

崎山喜理

私は波上宮に奉職しております、崎山喜理と申します。宜しくお願いします。

私の出身は那覇市の安謝でありまして、両親ともに沖縄出身でございます。このような仕事をしていましてよく「内地の出身の方ですか」と聞かれます。私自身、さほど訛りが強くなく、沖縄らしい顔つきではないので、そのたびに「私ねー、わん沖縄人うちなーんちゅやいびんどー」と釈明します。

特に古い世代の方は沖縄人か内地の人の違いに敏感でして、例えば私の姉が数年前に関東地方の方と結婚しまして、そのときに私達子供に対して「あなた達からしたら、日本人と日本人が結婚するように思えるけど、私達からしたら日本人と沖縄人が結婚するようなもので国際結婚だよ」と言われました。

そうした沖縄の人としての背景が強い私にとって、沖縄にある神社は非常に謎な存在で

した。沖縄の神社は日常の中にごく自然に溶け込んでいるのですが、その始まりを考えるととても謎です。何故、日本の信仰が沖縄にあるのか。その疑問を考えることが、私自身にとって神社界に入るきっかけでもありました。

沖縄に神社がもたらされた時期は、おおよそ十四世紀中頃とされています。当時の沖縄は琉球王朝が栄え始めた時期であり、日本・中国・東南アジアなど広い交易を持っていました。その内の日本から伝来した文化には、当時の日本で流行していた新しい信仰が含まれていました。それは熊野信仰を始めとする神社神道や真言宗などの仏教でした。

古くから沖縄では、神は海の彼方から来るものと考えられ、日本人の商人や僧侶が伝えた新しい信仰は特別な力を持った信仰として迎えられました。その中で神社神道は王家や王府役人らに信仰されます。十四、五世紀ごろには琉球国の主要都市であります那覇首里周辺に神社が建てられ、十六世紀以降には郊外にある普天間、金武、離島などに神社が建ちました。これについては諸説ありますが、時代が下るにつれて上層階級で定着した信仰が次第に地方へと広まったと言われています。

その中でも、当時の王府から保護を受けていた神社は「琉球八社」と呼ばれており、それらのほとんどの御祭神は熊野三神を祀っています。ではなぜ、沖縄には熊野信仰が残っ

たのでしょうか。同じ頃には他にも日本の神が伝えられており、八幡神を祀る安里八幡宮や、天照大神を祀る浮島神社などがあります。こちらでも王府により神社が建てられました。が、八幡信仰や神明信仰が一般まで広がることはありませんでした。

熊野信仰が広まった理由として、琉球のニライカナイ信仰と熊野の浄土に対する信仰が似ているからではないかと言われています。その共通した信仰は「海の彼方にあつて神々が住み、死者が赴く桃源郷」というものです。当時の琉球の人々にとっては、熊野の神は自分たちが信仰してきた神と同じものとして感じられたのかもしれませんが。逆に先ほどの「武士を守護する八幡神」や「皇室の祖先神である伊勢の神」は琉球の人々にとって親近感を得られず、信仰が広まらなかったのではないのでしょうか。

また、これら琉球八社の立地には「海や洞窟が隣接している」という共通点があります。波上宮は海に面した崖の上に立っており、崖の中ほどには洞窟があります。この洞窟は沖縄貝塚時代の埋葬遺跡であり骨と土器片が出土しており、その上部、当宮の西側には御嶽が存在しています。普天満宮の起源も、洞窟に琉球古神道の神を祀ったことに由来します。このように、沖縄の神社の多くは共通して洞窟を中心に神社が建てられています。

沖縄では古くから洞窟は異界の出入り口とされてきました。太陽は西の海に沈んだあと、

洞窟を通過して東側へ移動し、また生まれ変わって海から昇ると考えられていました。洞窟は太陽の死後の世界で、同時に再生をつかさどる場所として認識されていたのかもしれない。

縄文時代には既に、居住用の洞窟と埋葬用の洞窟とに分けて使用されていた形跡があると言われています。これら洞窟はやがて神聖な場所として崇められ、多くは御嶽となり、一部はのちに神社を勧請する土地とし選ばれました。つまり、沖縄の神社の多くが洞窟の近くに設立されたことは、神社が古い信仰の延長線上に採り入れられたことを示しています。

以上のように現在の沖縄の神社は、古くからの沖縄の信仰と外からもたらされた神社神道がお互いの特色を一致させながら発展していったことが伺えます。これらの事を通じて感じることは、緩やかな文化の融合と言いましようか、互いの文化の違いを基により良い文化や歴史が生まれるということです。今日の人との関わりにおいても、互いの違いにとらわれるのではなく、それを基により良い関係性を発展させたいと切に願います。

(沖縄県 波上宮 権禰宜)

天孫降臨にみる令和の御大典

伊賀昇三

皆様、こんにちは、『天孫降臨にみる令和の御大典』、鹿兒島神宮の伊賀と申します。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて令和という新しい時代を迎えましたがこの令和の語源は、万葉集の伴旅人の歌だそうでございます。大伴旅人は、凡そ一三〇〇年前に起こりました、「隼人の乱」の折りに、征隼人大將軍に任ぜられ鎮庄の為に大隅まで来られたと伝えられており、大隅国一之宮であります鹿兒島神宮では、令和と縁り深きものを感じるところでございます。

この鹿兒島神宮は御祭神が彦火火出見尊、古事記、日本書紀の神話、「海幸彦山幸彦」のお話しの山幸彦とも申します。海幸彦の釣り針を借りて、無くしてしまい、海の神様の国まで探しに行き、無事見つけて還って来たところが、鹿兒島神宮から五キロ浜へ下った、現在の隼人漁港がある浜辺であると伝わっております。

この彦火火出見尊のお父様が、鹿兒島神宮から車で四十分、標高五百メートルの所に鎮座致します霧島神宮の御祭神・瓊瓊杵尊。そしてそのまた父親が福岡の英彦山神宮の天忍穗耳尊そしてその親神様が、伊勢の神宮にお祀りされております、天照大神でございます。瓊瓊杵尊は天照大神の孫神様となる訳でございます。霧島神宮の奥に聳える、標高一五七四メートルのお山、高千穂峰。その頂に刺さっておりますのが、「天の逆錐」。この天の逆錐がある場所に、瓊瓊杵尊が高天原から降りて参ります。天照大神の孫神様が降りて来ましたことから、所謂これが「天孫降臨」と申します。この地上に最初に神様が降りて来られた所が高千穂峰、逆を言いますと、その道を昇って行くと、高天原にたどり着く訳でございます。ある意味霧島は神様の国に一番近いところとなるわけでございます。

そして、その瓊瓊杵尊が天孫降臨、天降りましし折に、天照大神より託されましたのが『三大神勅』、三つのご神勅でございます。

その一つ目が、『天壤無窮のご神勅』「豊葦原千五百秋之瑞穂国は、是れ吾が子孫の王たる可き地なり。宜しく爾皇孫就きて治せ。先矣、寶祚の隆えまさむこと、當に天壤と窮無

かるべし」と、このことにより古事記、日本書紀が編纂された、一三〇〇年前には、文書にて《皇統の正当性》が示されていた訳でございます。実際は初代神武天皇御即位より、今年で二六七九年となるわけでございますが、特に「吾が子孫の王たる可き地なり」この一文は、（注一）にございます「皇太子殿下の御即位に伴う式典」の御代替わりの歴史的根拠となるのではなからうかと思う訳でございます。世界の中で最も格式が高いと言われる英国王室でも初代より数えて今年で九五三年、アジアではタイ王室が七八一年、米國に至っては建国二四三年であり、圧倒的に日本という國が皇室が古の時代より続いて来ているという事でございます。

次に二つ目、『寶鏡奉養のご神勅』「吾が兒、此の寶鏡を視まさむこと、當に吾れを視るがごとくすべし。與に床を同じくし、殿を共にして、齋鏡と為す可し」と「八咫鏡」「草薙劍」「八尺瓊勾玉」、所謂、三種の神器であります。三種の神器を歴代の天皇陛下が受け継いで来られたということ、つまり《皇統の証》を引き継がれて来たという事、このことが（注二）にあります「劍璽等継承の儀」であります。因みに、なぜ皇統の証が鏡・劍・玉であるかと申しますと、諸説有りますが一説には、鏡は物事を良く見て識ると謂うこと《知識》を

表し、劍は知識を使うための健康な《身体》、玉は、すばらしい知識と強靱な身体が備わつたとしても、それは使い方次第では善にでもなれば、悪にでもなる。それを良い事に使う健全な《心》を持てということの意味しているそうです。そしてこの鏡・劍・玉は常日頃より、いつも磨いていなくてはならないものであり、磨かなくては直ぐに曇ってしまいます。三千年以上もの昔から歴代の陛下は、このような清らか御心で天皇を受け継いで来られた訳でございます。また更に、文武両道という日本人のすばらしい教えのなかには、この三種の神器の精神が詰め込まれているのではないだろうかとも思うのであります。

そして三つ目は、『斎庭の稲穂のご神勅』「吾が高天原に所御す斎庭の穂を以て、亦吾が兒に御せまつるべし」と。瓊瓊杵尊は天照大神から穂をいただいて高天原から降りて来ます。霧島神宮には狭名田の長田という稲作発祥の地と謂われる御神田が有ります。お米は日本の原点であり、お米によって日本が発展していった事は云うまでもありません。陛下がご即位されて最初の年のお米を、天照大神に陛下自ら捧げられ食される儀式が(注三)「大嘗祭の挙行について」でございます。大嘗祭の齋行により天照大神の御神徳が天皇陛下へ受け継がれる訳でございます。

このように、天照大神の坐す高天原から天孫降臨された霧島神宮の御祭神「瓊瓊杵尊」、そしてその御子神・鹿兒島神宮の「彦火火出見尊」、またその御子神・鵜戸神宮の「鸕鷀草葺不合尊」、更にその御子神・宮崎神宮の「神日本磐余彦尊」、天孫降臨、日向三代の神々等「神日本磐余彦尊」が宮崎から東征されて奈良の橿原宮で初代・神武天皇として御即位をされた訳でございます。以来、今年で二六七九年、この年、今上陛下が一二六代目の天皇陛下として御即位され新しく令和と云う時代を迎えたのでございます。御即位にまつわる諸祭典・式典が、今年は賑々しく執り行われておりますが、その一つ一つが天孫降臨の折りの三大神勅に由来するものであらうと思われるでございます。

御代替わりの儀式は、時代の変遷と共に多少の形は変わりましたが、その心は、我が国の始まりに由来し太古の昔から連綿と受け継がれている訳でございます。

先人たちから受け継いだ世界に類の無い、我が国固有の素晴らしい伝統を後世へ残し伝えていくことが大切であり国民の務めであらうかと思われまします。そしてそれが国家の安寧と国民の幸福へとつながる訳でございます。

このように、天皇陛下を始め歴代の陛下は古の昔より日夜、国民の幸せと世界の平和を

祈り続けている訳でございます。

以上、天孫降臨からみる、令和の御大典でございました。

ありがとうございました。

（鹿児島県 鹿児島神宮 欄宜）

義長（どんど焚き）の日に

寺 本 正 徳

ああ、そのあんたはん、芥でも捨てるように無造作に放り込みなはん。その看板にお焚き上げの注意書きありまっしゃろ。その通りに協力してくれはりまつか。

なんて。この儂に注文付けはるんかいな。儂ここで一番古い氏子でっせ。餓鬼の頃よりこの森に来てますんで。ほんまに失礼な。

判ってまんがな。その古家さんでっしゃろ。古い氏子さんだからこそ声掛けたんで。

あんた、ここの総代さんやな。此処で炊き上げてくれんと何処に持っていくねんや。

凄い剣幕で反抗してきはる「総代さんも負けじと反発」、あんたはんの子供の時と今では事情が違いますんで、見ての通り神社の周辺がマンションやビルばかりでっしゃろ此処で火を焚き煙出すと苦情が来ますんで、消防や警察からも注意が来ますんで。

総代はんかそんな判つとる。あんたが子供にでも説教するように言いはるからなんで。

陰惡な会話を見兼ねた総代長は「古家さん、儂らが代わって説明しますで、此処は総代さんの言いはる通りにしなはれ。そんじゃあ、とんど焚きについて説明しますで」

上手な説明が終わるや取り巻いて人達から、拍手やら、そだ、そだの声も上がりました。突っ張り古家はんの「ばつの惡そうな顔」今でも昨日の事のように思い出します。

毎年一月十五日が巡り来る度に繰り返されていた、ドタバタに嫌気がして、ある時、先代宮司さんに、とんど中止にしたらどうでしょうと進言したことがあります。

事情を百も承知の先代宮司さんがたった一言、伝統行事だ、続けなはれ、お前はん知ってるやろ伝統行事一度でも火を消したら再興するにや大変なんで「ローソクは我が身を減らして人を照らす」これなんで、神に奉仕するもんは、汗を流せ、汗を流してなんぼのもんやで。

世の中捨てたもんじゃない「仏千人、神千人」世の中に無駄なこと何一つありません。お釈迦様だって、一切皆苦と説いてはるんで、みんな方法考えてみ、工夫してみなはれと言われた訓話に、よっしゃと燃えたもんです。

早速、会議を重ね、得た結論は「とんどの火は総代会で護る」だったんです。

今年もとんど焚きに立ち会い色んな事情を発見しました。顔みしりの婆ちゃんが現れ、

いま其処で耳にしましたが、総代長の亀山はんええ話しはったんですって……

ほんま、近頃の人「ありがとうさん、感謝の心」忘れとりますわ。そんじゃあ、わて感謝の心を込めて、アリガト。さん一年分の厄焚き上げさせて頂きますわと手を合わせて立ち去りはりました。その情景を見ていた人達から、ほんま物は言いようで和むなと歓声さえ上がりました。

やっぱし亀の甲より年の功かと妙に感心していたら、先代宮司さんの訓話が脳天を走りました。

「続けなはれ、続けなはれよ」だったんです。

今年も余計なこととは思いつつも参拝の方に左義長、とんど焚きの由来、歴史について説明しましたが、神社を取り巻く現状は年毎に厳しさを増し伝統行事ってなんや、の雰囲気が増々強うなったような気がします。

どんなの時期になりますと、やれ煙が入って窓開けられへんとか、匂いで洗濯物が干せないとか、精密機械に煙が入るとか、想像を越えた苦情が来るようになりました。

今年も可成り離れたお寺さんが見え風向きによっては、自坊にも煙や灰が飛んできます。んでと苦笑いして帰られました。

数年前までは、地域のことだ辛抱しなはれ、協力してくれはれやで済んでいたのに、この頃特に自己主張が強くなり、声出した方が得だとの論法が罷り通るご時世となり、氏神の行事とて「ノー」を突き付けられる時世になりました。

事ある毎に神社も地域発展のために山を供出したり、池を提供したりした歴史を説明するんですが、昔のことだったことかい」の風潮が巾を利かせます。ほんま難しい時代になりつつあります。

この森に（氏子の森に）憩いを求めて住まわれたのにと思うと理解できんでもありませんが人間様で造った世の中を忘れてはるんです。

先代宮司さんが何代も執念を持って護ってこられた伝統が時代の流れと共に萎んで行くのを残念に思い、なんとかしようと思う今日この頃です。

今般は、全国の神主さんに奉務社の赤恥を曝すのを戸惑いましたが、町中の神社で伝統行事を続けることの一端を報告し、「他山の石」にでもなればと思いい取り上げた次第です。昔々大先輩の大宮司さんから「心配すんな、お宮は無くならん。心して大神様に仕えや」の訓話を戴いたことがあります。

先代宮司さんの「続けなはれ」「この世の中に無駄なものありやせん」を心に秘めて、

今日も八十路の坂に鞭打って頑張っています。

（大阪府 稻荷神社 欄宜） 完。

「日本人と神社」と「ご縁」

田中達也

皆さんこんにちは。佐賀県鹿島市の祐徳稲荷神社から参りました、田中達也と申します。今日は「日本人と神社」と「ご縁」に基づいて、自分の実際に体験した出来事と、「ご縁」ということをふまえて、「神社とこれから」というテーマでお話をさせていただきます。

私は三人兄弟で、長男である私と三男が神職で、次男が医師です。また、親戚も神職が多いです。

まず事の始まりは、弟が僻地医療研修で、四国の愛媛県の病院に勤務していた時からです。当時、当直時に救急車で搬送された患者さんがおりました。山（石鎚山 標高一、九八二メートル）で滑落して、一時間以上も救急車に乗って弟の勤務する病院に着いたそうです。傷の処置をしている時、患者さんの気持ちを落ち着かせるため会話をしていると、自分の家は神社の家（神職が多い）と、何気ない会話をしたそうです。その患者さ

んだった方が、傷が治り父の里（実家）の脊振神社（佐賀県神埼市鎮座）に「御礼参り」に来られました。その時に私達家族は、そのことを知るようになります。

それから一年くらいたった頃、崇敬信者様の会社の出張祭典に私もまいりました。祭典後、会社の関係者の方が私に話しかけてこられました。

「私は神様に今までたくさん助けられてきました」

「実は昨年大けがをして救急車で搬送されてしまいました。その時に治療してくださった研修医の方が、手際がとてもよかったです、お医者さんの家計ですか」とお尋ねしたところ、〃僕の家は神職の家計です〃と言われました」

「私は神社とはとてもご縁があると信じています」

と話されました。私はどこかで聞いた話だとは思いましたが、少し詳しくお尋ねするとまさに弟のことでした。この偶然に大変驚き、

「それは僕の弟です」

と伝えました。

また話は変わりますが、私の奉仕神社では、日本人のご参拝者だけではなく、外国人の方が個人・団体共に爆発的に多くなってきた、それに伴い御札やお守りを受けていかれる

方も多くなってきました。外国人だからお祓いを受けない、お札やお守りを受けない、ということはないということを知りました。また、国や宗教・人種が違えども「祈る」という行為そのものは、時代や世代、国境を越えても変わらないものだと感じました。例えば、近年多くのタイの方がお越しにいただいておりますが、そのきっかけとなったのが、境内を全部貸切って映画の撮影を行ったことです。タイの人気俳優の出演も相まって現地で大変話題になり、またSNSの拡がりもあり佐賀県や祐徳稲荷神社を訪れる人が急増しました。最初は聖地巡礼のような形で観光されている方もおりましたが、次第に殿内でのお参りも増えてくるようになりました。お祓いを受けた方は貴重な「体験」をされたことも相まって、大変感動されていたそうです。また今ではマレーシアやシンガポールなど他のアジアの国からお参りに来られます。またアジアだけではなく、ノルウェー・アメリカ・カナダなどの欧米の方や、世界のサンタクロース（欧米系）が来社し、「サンタサミット」という会議を社務所で行い、その前にお祓いを受けられ玉串までされました。

またお守りに関してもお関心があるようで、こちらが説明すると納得して受けていかれます。今まで外国人に神社の授与品をお分かちする、ましてはお祓いを受けていただくといったようなことは、まったく考えられませんでした。しかし、現に多くの外国人の方が

来てくださることは、何かの『ご縁』だと考えています。しかしながら、そこで何もしなければ『ご縁』はそこで途切れてしまいます。それを持続させるには、変化し続けることだと考えます。

それぞれ別の場所でかわったことでも、点と点が線として繋がっている。まさにそれが『ご縁』だと実感しました。また自分も努力しなければならぬものではないものであると実感しました。

私たちも日々のご参拝の方と接しておりますが、きつとご縁でつながっていると思います。心して日々真摯に向き合い精進して参ります。

(佐賀県 祐徳稲荷神社 主典)

私の足跡は私の財産です

山 浦 一 男

皆様方こんにちは。本日は早朝より令和元年の例大祭注連降ろし作業に、当元の区長さんを始め皆様方、心一つにされお陰様で令和の始りの年に相応しく、立派にお祭りの準備も調い、大変ご苦勞様でした。心より感謝申し上げます。又、日頃はお宮さんに、奉賛会に真心のご協力を賜りまして、上座から大変失礼とは思いますが、改めまして厚くお礼を申し上げます。

尚、近年はスマホで見ました！と、県内外から、お宮を、お祭りを、観光に来られる方が年々増えました。三五七年前の寛文二年から、先人達の目と口と耳で、大事に忠実に語り継いで戴きました島子のお祭りを厳かに肅々と盛大に納めて戴きます様、心からお願ひ申し上げます。

さて、今日はお陰様で早く綺麗に注連降ろし作業を済ませて貰いましたので、大変恥ず

かしいんですけれども、私が今日迄歩いて来ました道のりを少し話してみたいと思います。幼い頃、明確に覚えていますのは、毎日の様におふくろは、右手に舌だごの入った鉄製のボールを風呂敷包みに提げて、左手で私の右手を引っ張り、今私が兼務いたしてます、小島子神社で仕事をしておられる大工さん等におやつを届けていた、三才か四才の頃を思い出します。そこで大工さんから貰って食べた舌だごの味は、今だに忘れられません。

又、冬の寒い夜、おふくろは、右手に提灯を提げ、左手で私の右手を引っ張り、お寺でお坊さんの難しい話を聞いての帰り道、私は眠くて眠くて、歩きながら寝た事も思い出します。

時は過ぎ、二十六才前後の一年半くらいは、愛知県で建設機械の修理工場を始め、長崎や熊本では、寿司屋のでっち奉公、広島では土方のトンネル掘り等、渡り鳥でした。最後に東京へ飛び、商社会社で商売の勉強を三年余りして島子へ帰り、本渡の電気店に入り、皆さん方を始め、高校時代の同級生や渡り鳥だった時の友人等、全ての方々へ、お願いに回り、買って貰い、半年で店長になりました。

順調に数年が過ぎ、量販店の出店を仰ぎ、閉店と同時にその電話番号を買い受けて、ソニーショップサウンドエイトという屋号で開業し、二十七才の若造のお願いで義理買い

もして戴き、お陰様で二人の従業員に給与も払えて、経営もなんとかやっていたのですけれども、開店から十七年目の暮れ。四才上の兄が飲食店の不振で、恥ずかしい事に姿を眩まし、私は銀行から見放され、三輪車操業の繰り返しで、とうとう年間売り上げの二倍余り借金を抱え込み、ある時自決も試みましたが、自決は卑怯だと自分に言い聞かせ、自分が負った借金は自分が生き続けて必ず払い終えないと、子供にまで罰が当たると思い、夜となく昼となく奔走し、生命保険も大半解約し、家族にもかなり惨めな思いをさせました。そういう時でも、皆さん方を始め、友人やお客様方は、一人として、私を遠目で見る人はおられませんでした。

ある時、高校時代のMという同級生が、ほいこれば使こうてくれいと、またある時は、小中学校時代のKという仲間が、こっぱ使うて良かよ！と言つて、かなりの大金を貸してくれました。世の中には、神様つて本当におらすとばいと、家内と喜び合いました。平成七年に、佐賀県からY氏が、突然来て、あんた損害保険ばせんね！と急に言い出しました。Y氏は、かつてソニーの会社に居て、私が開店当時、天草の所長でした。が、今は某損保会社の代理店をしているとの事でした。

彼に勧められ、資格も取り、電気製品販売と平行して、昼夜走り回り、昭和四十七年か

からお世話になりました電気の仕事を、平成十年に保険業務だけとして参りました。が、電気製品の修理や、損保での事故処理、又前々からの借金返済の工面等で、心身とも一杯になり、平成十三年に胃がんの手術を受け、ステージ4と診断され、抗がん剤を勧められましたが、自分の気力で必ず治します、と言って、そのまま十八年が経った今でもお陰様で生かされております。

そして五年前、身の丈も省みませず、この恥じをお引き受け致しまして、恥の重さ、事の重さをひしひしと感じる毎日でございます。

実は、今年正月七日、まだお屠蘇の香りが漂う中、父の様な存在だった、十才上の長兄が、くも膜下出血により、一時間で冷たくなってしまう、その節は皆様方には、大変お世話になり、本当にありがとうございます。

暫くして、兄の遺影を壁に掛ける為、額縁を整理してましたら、父への感謝状が三枚ございました。

一枚目は、神社本庁 統理 鷹司信輔閣下より、二枚目は、熊本県神社庁 庁長 緒方 定義閣下より、三枚目は、天草支部 支部長、岡本伊織閣下より、三枚とも内容は同じく、小島子神社の幣殿と拝殿を自費で建立し、昭和二十七年五月に竣工し、十月に授賞してい

ます。父は当時四十五才で、今から二十八年前、八十四才で他界致してますが、父からも、母からも、この事を一度も聞いた事は、ございませんでした。

私は、額縁を綺麗に拭きながら、三、四才の頃、母と舌だごを小島子のお宮さんへ、持つて行つたのは、この事だったのかと、当時の父の思いに浸りながら、六十七年前におふくろが、作つた舌だごの味を思い出していました。

私も生かされて来たお陰様で、七年前に、全ての借金も完済する事が出来ました。結びに、友人、知人、お客様は、私の限り無い財産でございます。

本日は本当にご苦勞様でございました。

(熊本県 大島子諏訪神社 宮司)

男はこうでなければならぬ

河本文夫

近年、学校で道德教育が始まりました。道德の中に宗教があり宗教の中に道德があると
言われ、宗教と道德は紙一重であります。

そこで思い出すのは、新渡戸稲造氏の「武士道」を書くきっかけになった出来事です。
その新渡戸稲造氏がベルギーの著名な法学者ド・ラヴー氏の家招かれ、歓待をうけて
数日を過ごしていたときのこと。ある日の散歩の途中で、宗教の話題が出た。

「日本の学校では宗教教育がない、とおっしゃるのですか」と、この尊敬すべき教授が
尋ねられた。私が「ありません」と返事をする、と、教授は驚いて、突然立ち止まり、ビツ
クリするような声で再度問われた。

「宗教教育がない！それではあなたがたはどのようにして道德教育を授けるのですか」
私はその質問に愕然とし、すぐに答えることができなかった。なぜなら、私が子どもの

ころに学んだ人の倫たる道德の教えは、学校で習ったものではなかったからである。そこで、私の善悪や正義の観念を形成しているさまざまな要素を分析してみても、そのような観念を吹き込んだものは武士道だったことに気づいた。とあり、そこで新渡戸稲造は、あの有名な「武士道」を著すのである。さてその原点となつたのは、この地、佐賀藩の山本やまもと常朝の口述書の葉隠はかくれであります。

武士道の根幹をなす忠義、崇祖、親に対する孝行心などの考え方は、神道の教義によつて武士道へ伝えられたのである。

その武士道精神が社会の中に満ち溢れ、其の中で我々先輩は学び育つていったのが日本の社会であつたのです。

その現れが、時代劇であり、その中に表現されるのは、忠義であり、親子の愛であり男女の愛であります。さてその時代劇の最たるものは、

さ、何でしょう。

水戸黄門。今でも再放送され人気ありますが、やはり、大作となると「忠臣蔵」でしょうか。

若い人はこの作品を観たことも無いかもしれませんが、江戸城松の廊下での赤穂藩主

浅野内匠頭あさのたくみのかみと吉良上野介きらこうすけのすけによる刃傷沙汰の理不尽な責を負い切腹と相成つて非業の死を遂

げた主君、浅野内匠頭長矩あさのたくみのかみながのりの仇を打つため、家臣の筆頭家老、大石内蔵助は密かに策を練

る、そして満を持し吉良邸に討ち入り仇を取るその一連の物語であります。その中で私の

好きな場面、それは「東下りあずまくだり」の段です。

内蔵助が吉良を打つため志士ご家来衆と江戸に向かう。

しかし、宿に泊まるも、大石内蔵助とは宿帳に記すことは出来ません。吉良も何時大石

内蔵助が、江戸に入るかを、網を張っている訳ですから。

そこで名を偽り、日野家人垣見五郎兵衛かきみごろうべえと名乗り投宿するのである。

ところが本物の垣見五郎兵衛が、その宿にやってきた。

「何、垣見五郎兵衛が投宿している」と知り、宿の主人に案内されその部屋に通される。

「初めてお目にかかる。手前日野家人垣見五郎兵衛。御貴殿の御姓名は？」

「日野家人垣見五郎兵衛」

「なに、無礼な、当人を前にして偽りを申すとは」

「なにを申される、突然我が名を語り、偽者よばりとは、無礼なのはお手前では」

「なにわしが偽者だと」

「さよう、このたび、増上寺のご慶事のお祝いのため日野家よりお祝いの品をお届け申す大切な御用道中でございます」

「しからは尋ねるが、貴殿が、垣見五郎兵衛なら、日野家諸太夫捺印の道中手形をお持ちのはず、それを見せてもらおうか？」

「何を申される、通行手形など易々他人にお見せするものでない」

「お持ちでないのじゃな？ お手元にあるのであれば、どうぞ見せていただきたい。あるのであれば紛れもなき本物。お見せいただければ拙者このまま退散いたすが。どうじゃな……お出しめされい」

「そこまで仰せられるのであれば、お目にかけてよう……」

大石内蔵助は、やむにやまれず脇にある手文庫から何もかかれていない奉書を出す。そして垣見五郎兵衛にしずしずと手渡す。

垣見五郎兵衛その奉書を受け、一折、二折、三折と奉書を開く、しかし白紙の奉書、何も書かれてはいない。

垣見五郎兵衛、ムツとしてその奉書を大石内蔵助の眼前に開いてみせる。

「これが日野家の通行手形と申されるのか？」と捻じり寄る。

と、その時、手文庫の蓋に描かれた浅野家の「丸に違い鷹の羽」の紋が目に入る。

ムム……なに……そうか……この男は、浅野家筆頭家老、大石内蔵助か！

主君切腹に相成り、その無念さは、武士として断腸の思いであろう。と垣見五郎兵衛は、偽りを申す大石内蔵助に武士の情を掛ける事になるのである。

「……わかり申した。……よくわかり申した。まさにこれは紛れもなき日野家の道中手形。ふらち不埒にも偽りの名を語りしことをお許しくだされ……」

と、本物の垣見五郎兵衛が深々と頭を下げる。

大石内蔵助、絶体絶命のこの機に、垣見五郎兵衛の見せるまさに武士の情けに、

「いや……いや……、武士は相身互い。あいみがよくよくのご事情があつてのこととお察し申しあげる。

苦しき境遇に有らばこそ、人の情けは身にしみてありがたきもの……」

大石、その目に涙が浮かぶ

暫く、武士と武士、目と目の無言の……

「おー、長居を申した……失礼つかまつる」

と垣見五郎兵衛、膝を立て起座しようとする。

「おーそうじゃ、これは手前が偽造せし日野家の道中手形、もう役には立ちませぬ。お渡しもうす故、貴殿の手で何なりとご処分のほどを！……この上は、こころおきのう、このたびの御用、果たされますよう影ながらお祈り申し上げますぞ」

とその時、襖が一斉に開き、ご家来衆が深々と平服している。垣見五郎兵衛はさーっと其の御家来衆を見渡し

「……武運を祈ってお・り・ま・す・ぞ、御免！」

といって、垣見五郎兵衛、家臣に「引き上げるぞ」と宿を後にします。

「東下り」の一場面です。

此れに日本人は泪をし、男としての何と申しますか美学を感じ、男の心を磨いたのであります。

男はこうでなくてはならぬ。

(山口県 宮尾八幡宮 宮司)

人生儀礼について

前 中 俊 二

人生儀礼とは、人が生を受けて人生の節目ごとに様々な儀礼を受けて成長をしていくことをいいます。神社の中でも誕生してから年齢を重ねていき、歳の節目ごとに神社に参拝してお祓いを受けていく人生儀礼があります。

先ず誕生してから初めて神社に参拝するのが「初宮詣」であり、次に「七五三詣」、「成人祝い」、厄年の方々の「厄年祓い」、「還暦や古稀」といった歳祝いの順に参拝し、神前に向かって成長を感謝していくのと同時にこれからの平穏をお祈りしていきます。

そこで、今回は「七五三詣」の歴史について説明をしたいと思います。

なぜ七五三詣にしようと思ったのかというと、私自身が七五三詣を受けていないからです。私は、今はご縁があり神職として神社で奉仕をしています、元々社家ではなく一般家庭で育ち神社に馴染みがほとんどありませんでした。ただ、今こうして大人になり神職

として生活するようになり、毎年七五三のじきになると「ああ、自分は子供の頃七五三はしていなかったなあ」と昔の記憶が思い出されます。

そこで、今回改めて自分がしなかった七五三とは一体どういうものだろうと思い、その歴史についてお話ししたいと思います。

そもそも「七五三」というのは総称であり、明治時代になって呼ばれるようになりました。元々は三歳の男子、女子が今まで剃っていた髪を伸ばし始める「髪置きの儀」、五歳の男子が初めて袴を身に着ける「着袴の儀」、七歳の女子が着物を着けるに紐で結んでいたのを帯に変えて結ぶ「帯解きの儀」と三つの儀式を子供の頃に行う儀式として併せて呼ぶことを指します。

ただ、始まった歴史は古く、初めに行はれていたのは平安時代から始まったとされています。しかし、始まりが平安時代だけであり、行う年齢には明確な決まりがありませんでした。室町時代には九歳の男女が「帯解きの儀」を行っていたとされており七五三の年齢と関係なく行っていたとされており、江戸時代になってようやく全国に広まり今の年齢と儀式の形が整っていったとされています。

次に、七歳、五歳、三歳と年齢が決まっていた理由としては、現代では医療が発達し

子供が病氣になったとしても、病院で治療をおこなえば適切な治療をしてもらい、ほとんど治してもらええると思います。しかし、昔の子供は「七歳までは神の子」と言われるぐらい流行り病にかかってしまうと亡くなってしまいう子供も多かったです。そこから、言葉を徐々に理解をし始める三歳から乳歯の生え変わる七歳頃までの子供の成長を願う儀式として、七歳、五歳、三歳の段階を踏んだ年齢が決まったとされています。

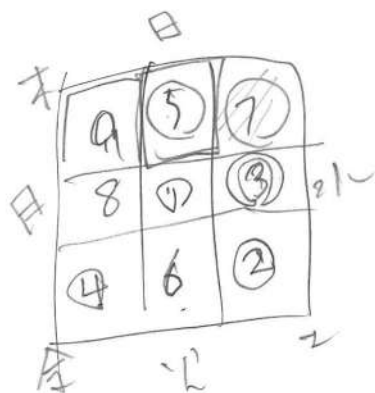
次に、「七五三の日」が十一月十五日になっているのには二つの説があるとされています。一つ目は、江戸時代に三代將軍徳川家光が自身の子供の健康を祈願して、その後元氣に成長をして大きくなっていったことから、その祈願をした日が十一月十五日であったという説、もう一つは旧暦の十一月が中国の天文学で用いられていた二十八宿の鬼宿日にあたり、婚礼以外のお祝い事は何事にも吉とされていたため、その日に氏神様に秋の実りの収穫の感謝をするのと共に子供の成長の感謝、祈願をしていたという二つの説があります。

また、七五三の定番として連想されるのに千歳飴があります。この千歳飴もまた子供の成長を願う親の思いから生まれたものとされています。先に話したように昔の子供を流行り病で亡くすということが多かったことから、江戸時代に「粘り強く長く生きて欲しい」という親の切実な思いから生まれ、入れる袋にも鶴や亀等といった健康長寿を意味する絵

が多く描かれています。

ここまで七五三についての歴史の説明をしましたが、改めてこのような儀礼、儀式を小さい頃から経験し、また続けて残していくことが重要だと思います。それは、日本人の心の原点に神道があるからです。日本人は昔から常に神様に感謝をしながら生きています。そして、その神様に見守ってもらいながら日々の生活をしています。人生儀礼においてその気持ちを大事に守っていくことが重要であり、残していく必要があると思います。神社に小さい頃からお参りしてもって、この経験からこの大事なことを覚えるきっかけになってもらえればいいと思います。

(佐賀県 祐徳稲荷神社 主典)



神と弓

瀬戸一徳

輝かしき令和の御代をお迎えし、当社でも非常に多くのご参拝の方にお越しいただいております。特に四月三十日から五月一日にかけては、新たな時代を奉祝すべく、午前一時までお宮を開門し、氏子の皆様と共に平成の御代に感謝申し上げ、これより迎える令和の御代に大きな期待を込めてお祝い申し上げます。

皆様もご存知の通り、この令和への御代がわりは国民の大きな関心を寄せており、神社も御朱印客などで賑わうことで、我々神職に対するご参拝の方からの声と眼差しに一段と気を引き締めて臨まなければと改めて思うのです。

我々神職が常日頃、ご神前にて御奉仕をする時、念頭に置かなければならないのは、神職とは神と人との仲取り持ちであることです。決して驕ることなく、神のみこともちとしてその心を広めゆき、人の範たるべく研鑽を重ねる。

そんな中で、私が最も大切にしていることは、普段からの「姿勢」です。背筋のピンと伸びた美しい姿勢が理想ですが、この美しい姿勢を以て神明に奉仕する。もしくはそれを目指すべきである。というのが私の持論です。祭典の中で正しい作法・美しい姿勢・礼節が重なってこそ誠の祭祀であると信じているのです。この姿勢に関しては、今いらつしやる皆様にもお伝えできることではないかと思います。新たな御代を迎え、平成への感謝とともに、同じく平成に置いていくべきものもあるのではないかと思い、本日お話しさせていただきます。

私は、高校時代弓道部に所属しており、一年のうちの三六〇日は弓道場にて汗を流しておりました。御存知の通り弓道は日本の武道です。武道とは相手を制圧し殺傷する為のものではなく、身体鍛錬・精神修養と人格完成を目指す「道」の理念が加わったものです。

高校に入学してすぐに弓道場の門を叩いたのですが、顧問の先生より先ず最初に躰けられたのは、「弓は単なる武器ではなく、神事にも用いられる神聖なもの。弓を粗末に扱うことなく、自分のご先祖様だと思いなさい。」というものでした。弓は人間より上位に位置しているもので、乱雑に扱えば拳が飛んでくる。そんな世界でした。

弓道部に入部した私は弓の道にすっかり魅了され、射技を極めるべく対外試合や昇段審

査と己の力を高めるために様々な修練を重ねました。しかし顧問の先生からの指導で常に指摘されるのは姿勢のことでした。当時は神事の世界の外にいたので、何故そこまで姿勢に拘るのか全く不思議でした。袴の着こなしなど余りに見苦しい射手が射場から退出させられることはありますが、姿勢の美しさを重んじるシンプルながら奥深い武道であるという程度の認識でした。

学生弓道の勝敗は分かりやすくて中つた的中数で競われます。どれだけ型に気品が無くても的に中りさえすれば得点となります。しかし、弓道本来の理念の中に「真・善・美」という考え方があります。「真」は正しい型。真なる弓は偽らず必ず的中する射。「善」は平常心。これが無い射は落ち着きがなく、貧相な射技となります。「美」は真と善の結晶体であり、これらが揃うことで初めて三位一体となり、人の心を打ち、感動を与える射となります。これらが一つでも揃わない射は、ただの弓術であり品格も無い不恰好なものとなってしまうのです。

型の完成と平常心を以て臨む時、ここに美しさが生まれる。これはご神前にて奉仕する我々神職にも通じるものがあると私は感じるので。神職が祭式を行う際、一つ一つ細かな作法が祭典の中に散りばめられています。「神道の教えは祭式にあり」との言葉通り、

人の思いを神々にお伝えするには厳格な祭祀を通じ、また神からの恩頼を人々にお授けするにも厳格な祭祀が必要です。神前での姿勢は、そのまま「至誠」へと昇華する。私は弓を通じて姿勢が至誠へと繋がることを教わりました。

姿勢ひとつで受ける印象が大きく異なることは、氏子の皆様からの信頼を左右する要因の一つである。御代が替わられ、時代も変わろうとしておりますが、淨く正しく明るく直ぐ、神社をお護りする者として、「真の心」「善き心」「美しき心」を信条とし、これからもお社にお仕えしたいと存じます。

(福岡県 風治八幡宮 権禰宜)

学校で習わないキリシタンの歴史

大島 靖彦

私がキリスト教を意識したのは、小学校六年の時、長崎に行った修学旅行の体験でした。二十六聖人の石碑の前でその説明を受けたように思いますが、内容は覚えていません。ただ、この石碑の人達が亡くなられたことは分かりましたが、何が原因かは長らく分からず終いでした。それから、時が過ぎ大人になり、夏になると毎年、ハウステンボスヨットレースのため、ヨットで佐世保湾から西海橋の下をくぐり、大村湾に入るわけですが、佐世保湾の入口のすぐ右側に何か気になる集落と、十字架の立つ八ノ子島があったのですが、何年もの間、そこがかつて歴史の舞台に登場した場所とは気付ませんでした。実はそこは横瀬浦という地名で戦国時代の記録を著した「日本史」の著者で、有名なポルトガルの宣教師ルイス・フロイスが日本に最初に降り立った港ということを知り驚きました。このことが契機となり、キリシタンと日本との関わりを調べ始めた訳です。

平戸や長崎や島原を旅行すると、少しづつ全体像が明らかになり、だんだん面白くなってきました。まず、以前は外国に港を開いたのは、平戸から長崎へ移ったと長年単純に思っていました。実際は平戸から横瀬浦とか大村とか口ノ津とか福田とかいろいろの変遷を経て、最終的に長崎に落ち着いたことも分かりました。

大村市へ行った時などは、市内の至る所にキリシタンの遺跡が見受けられ、不思議に思っている、江戸時代に「郡崩れ」という事件が起きていたことを知り驚くと同時に納得しました。また、長崎に行った時は、諏訪神社の掲示板にキリシタンから神社を焼き打ちされたことが書かれてあり、強い衝撃を受けました。

さらに、数年前ですが、雲仙へ旅行した時、ホテルの図書室で偶然キリシタン関係の本を見つけ、それには大村での出来事が詳しく載っており、著者が大村市の富松神社の久田松宮司さんということが分かり、早速、本を手に入れましたら、大村では神社仏閣が大規模に破壊されたのみならず、僧侶までもが迫害を受けたことを如実に知り、大変参考になりました。神社仏閣を守る者にとっては、さぞかし、大変な災難に合わせ苦勞されたことを知り、自分達が如何に恵まれていることを知ると同時に、今まで持っていた印象が一挙に崩れ去りました。

幾つか分かった事を述べてみますと、まず、トルデシリヤス条約があります。

これは、スペインとポルトガルの間で結ばれた条約で、西経46度37分を分界線として、そこから東はポルトガルに西の地はスペインに領土保有の権利と同時にキリスト教布教の義務が与えられる大国による世界分割支配の最初であり布教面はイエズス会に委ねられたことです。

次は、大村純忠による大村藩の強制改宗問題です。イエズス会のコエリユによる神社や寺院の破壊活動や僧侶、神官に対する迫害です。

三番目は天正遣欧使節の件ですが、これらは、四人の少年をイエズス会のウアリニャーニがヨーロッパに連れて行った事でした。人数は四人の少年だけだと思っていましたら、他にも数人いることを初めて知りました。

四番目は、日本人の奴隷問題です。ポルトガルが日本人を奴隷にして、シナやインドヨーロッパまで連行することで、多額の利益を得ていたことに宣教師が加担していたことです。五番目は、キリシタン宣教師による日本占領計画です。コエリユによってポルトガル・スペイン軍による日本攻撃計画を、本国やフィリピンに打診しようとしていたことやイエズス会やキリシタンを守るため、長崎を要塞化しようとしていたことです。これ等は、オ

ランダがスペインから独立したことや、アルマダの海戦でスペインがイギリスに負けたこと等が原因で実現できなかったようで幸いでした。

六番目は、二十六聖人の件ですが、豊臣秀吉によって行われたものですが、一般的には弾圧と言われていますが、国防上の観点から実施された治安維持構築の一貫であり、秀吉にしてみれば天下人としての判断だと思います。現在、長崎の大浦天主堂を秀吉が見れば、罪人が聖人とはさぞ驚くだろうと推察します。

七番目は、一六五七年に大村藩で起きた「郡崩れ」と言われるもので、島原の乱の二十一年後に起きた隠れキリシタン潜伏事件が発覚した件です。

このように、豊臣秀吉の戦国時代から江戸初期にかけては、激動の時代で統一国家を目指した豊臣秀吉、徳川家康にしてみれば、頭の痛い問題でキリスト教禁教に踏み切ったのは理解できます。

以上のような点から、今まで持っていたキリスト教及びキリシタンに対する捉え方が全く変わりました。キリスト教弾圧とか迫害とかマスコミ等で盛んに報じられ、「可哀そうだ」と最近まで思っていました。が、180度変わって実際は逆だったことが遅ればせながら分かり、国防上の治安維持のための施策ということが分かりました。

つまり、今で言えば、イエズス会の宣教師は国を乱す国際テロリストであって、西洋の一方的な価値観を押し付け布教し、洗脳し相手を尊重しない独断的思想の持主であり、日本を征服する意図を持っていると感じ、腹立たしさを覚えます。

なお、イエズス会という呼称は昔から、何かおかしいと思っていましたら、ある本に、正しくは「イエス軍」で、当時の歴史について書かれた本や教科書では、「会」と誤訳していると書かれており、私の感が当たったと思いました。翻訳しますと、「イエズス隊」と訳して目的を得ていると思います。

天正遣欧使節の意義評価については、不幸な結末に終わり、宣教師達はむごい仕打ちを行っただけだと思います。

日本人奴隷については、以前スペインの町に日本人に良く似た人や名前を持った人がいるという新聞記事を読んだのを思い出し、納得した次第です。

大村藩の大村純忠に関しては、とんでもない殿様で民衆は大変迷惑混乱しただろうと気の毒でなりません。しかし、かなりの数のキリシタンが存在していたことも事実で、その理由は不安定な世の中であつたのが一因かもしれません。

改めて思い返すと、キリシタン大名がかなり居たにも関わらず、豊臣秀吉、徳川家康等

の天下人は、外国の圧力に屈せず、国を守ったことに敬意を払うと同時に、現在の日本があるのはこの傑出した統治者のお陰だと感謝せずにはおられません。

ヨーロッパの教科書には、キリスト教についての記述が必ずあるようですが、日本の教科書には、キリスト教弾圧についての記述はあっても、神道についての記述は一言も書かれていません。自然と一体となっている共生の信仰である神道こそが生詰まった世界を救うことができます。このことを正確に教えられないものですから、私達は間違った認識を持つことになります。日本の平和な未来を描く上にも、正しい歴史を学ぶためにも、きちんと正確に教えて頂く必要があります。

(福岡県 六所神社 欄宜)

名付けの難しさ

山田 誠也

本日は皆さんに「名付け」についてお話させていただきたいと思います。誰にでも必ず名前がありますが、そもそも「名」とは何でしょうか。辞書を引きますと、有形・無形の事物を他の事物と区別して、言語で表した呼び方とあります。つまり、「名」が付いていることで、その他多くの事物とは異なり、初めて「個」別のものとして特定されることとなります。

さて、神社で取扱う「名付け」は、新しくお生まれになった子供に対して行います。赤ちゃんの名前とは、その赤ん坊にとって一生の宝物であり、親が子に与える最初にして最大のプレゼントとも言えるべきものであります。その為、名前には親から子への様々な想いや願いが込められています。優しさ、明るさ、健康、幸福等は誰もが願って止まないものでありましょう。名付けを行う際、そうした想いや願いを加味し出来得る限り希望に沿っ

ていくことが大切ではないかと考えます。

先程もお話ししましたが、名付けを行う際に親御さんの意を汲むことは大切です。しかしながら、意を汲めば後はどうでもよいというわけにはいきません。名付けにはある一定のルールを設け、そのルールに従いながら可能な限り意を汲み理想に近づけていくこととなります。ただし、ルールと一口に申ししましても、漢字には画数や読み方が存在するなど、制約があります。その他にも様々な要素から構成されたルールは理解しがたく、難しい印象を受けます。また、名前の読み方に制限は無くとも、使用できる漢字には限りがあります。漢和辞典を片手に、どの漢字をどの組み合わせで使うのかを考えるのは大変興味深くもあり、根気のいる事でもあります。

ここまでお話を致しますと、成程、確かに「名付け」とは単純にはいかないものだと思います。われる方もおられることでしょう。しかし、名付けられる名前には少なからず流行があるようです。例えば、過去に流行した名前の中に「○子」という名前があります。女性に多く見られる名前ですが、「子」は元々、古代中国で君子・王子等の賢い男性という意味が込められた尊称であり、転じて高貴な男性を表すようになって日本でも使われるようになったそうです。小野妹子や蘇我馬子は確かに上流階級の男性でありました。女性にも「子」

が使われるようになったのは平安時代以降でしたが、皇族や貴族等の特権階級で流行し始め、明治時代に戸籍法が制定されて以降、庶民の間で爆発的に流行しました。

こうした流行の中で、最近新たに流行するようになったのが所謂キラキラネームであります。キラキラネームと呼ばれる名前は、自由な読み方を多用することで、可愛らしさや格好の良さを強調し、名前の個性化を図るもののようです。人名には常用・人名漢字以外は使用することが出来ないことが、こうした風潮を生む要因の一つとなったのかもしれない。いずれにしろ、名付けを行う側にとっては、これまでよりも遥かに難易度が増したようにも思えます。キラキラネームと呼ばれる名前の多くは、漢字が本来持つ読み方や意味ではなく、イメージに重きを置きます。例えば、「香」という文字を見て、「好いにおい」を連想し、そこから発展して「ミント」と読む。凡そ、このような連想ゲームに近い形で名付けが進行します。こうなると、一定のルールの下で行う名付けとは大きくかけ離れる事となりますので、従来行ってきた名付けを一から見直す必要もあるのかもしれない。

他方で、前の時代に戻ろうといった流れもあります。先程ご紹介しました「○子」という名前は、明治期に庶民の間で流行し始め、長きに亘って人気の名前でした。しかし、高度経済成長期を境に減衰し、流行は下火となりました。ところが最近になって徐々に増え

てきているそうです。「子」のみならず、「心」や「湖」等の漢字が用いられる事で、読み易く、それでいて個性も保たれるような名前で人気を博しているようです。

命名の研究をされている牧野恭仁雄氏は、名付けについて「歴史上言えることは、その時代に最も人々が求めている得難いものが表れる」としています。「○子」という名前の増加は、近年頻繁に聞かれるようになった個人主義や保護主義といった「個」を大切に考える方から、伝統的なものに魅力を感じ大切にしていた時代を取り戻す事を人々が求めているからなのかもしれません。

前述致しましたが、名前は親から子へ贈られる最初で最大のプレゼントです。古来より、産まれてから七日目に赤ん坊の枕元で『宜しく○○と称す可』と名前を神様に奉告して加護を仰ぎ、子供の健やかな成長を願ってきました。キラキラネームの登場も、どこか閉塞した世の中に風穴を開けたいという願いもあったのかもしれません。そして回帰もまた、古き良き伝統を取り戻したいという欲求の表れなのかもしれません。どちらにしましても、親が子を想う気持ちを大切にし、最大の贈り物に関わる責任を持つて名付けに携わらねばなりません。従来のルールに固執し、新しい流れを否定するばかりではなく、柔軟に対応した名付けを行うことで神社に新生児の名付けを託した人々のお手伝いをする。そうした

ことが、神社と人の長い長いお付き合いの最初の入口なのかもしれません。

(岐阜県 伊奈波神社 権禰宜)

〴〵キリシタンの島〴〵から

田 口 孝 雄

皆さま、九州の「天草」と聞いてどんなイメージをお持ちでせうか。いろいろある中には、きつと「キリシタンの島」といふのもあるのでせう。いや、もしかするとそれが一番かもしれないね。「キリシタンの島にも神社はあるのだらうか？」などと…。

片や熊本県内の神宮大麻頒布率を地区別に見た場合、一貫して天草地区がダントツ一位だといふのも事実なので、今日はさうしたことの時代背景などについて少々お話してみようと思ひます。

*

近ごろ「キリシタンの嵐が吹き荒れ…」と書いたところ、目利きの編集者が「キリシタンの嵐」ではなく「キリシタン弾圧の嵐」でせう、と言って赤ペンを入れてきました。これほどさやうに、多くの日本人の頭の中のキリシタンは、弾圧される人びとであつて、弾

圧する人びとではないのですね。

しかしかつてキリシタン大名・小西行長支配のころ、肥後の天草には五十の教会、三万のキリシタンがいたと言はれ、寺社破壊が激化してゐました。肥前の大村藩や島原藩でもキリシタン大名・大村純忠、有馬晴信の指示で神社仏閣の破壊が拡大してゐました。入信を拒んだ神主が殺害され、墓地の石塔まで倒されるといふ酷いものでした。有名な宣教師フロイスは平然と書いてゐます、「折から寒い季節、仏像はただちに割って薪にされ、我らの司祭館でかなりの日数、炊事に役立った」と。破壊された墓石は有馬氏の日野江城^{ひのえ}に運ばれ、階段の踏み石に転用されたのです。ええ、今もそのまま残つてゐます。想つてもみてください、キリシタン大名有馬の家臣たちが住民の墓石を踏んでお城へ上り下りする、悪夢のやうな光景……。実におぞましい。

ここでもうしても言っておかなければならないのは、只今の一件はイエズス会一五八二年（天正10）の日本年報に出て来るもので、長崎で始まった〈絵踏み〉より半世紀近く前のことだ、といふことです。かういふことがあったからああいふことがあったのであって、順序を間違へてはいけません。

バテレンたちが「聖なる使命」に燃え、万里の波濤を越えて未踏の地へ赴くのは勝手で

すが、その地の人々の信仰の対象たる神仏を「悪魔」と罵倒し、次々に社寺を破却・焼却するといった乱暴狼藉がいったい文明人のすることであらうか。ま、そこが大航海時代、イエズス会の戦闘的な宣教が近現代のキリスト教のそれと大きく違ふところである、とは思ひますけれども。

*

豊臣政権時代のいはゆる伴天連追放令、徳川政権下の「伴天連追放之文」をつなげて読んでゆくと、愛と平和を唱へる一神教が、なぜ日本で「邪教」とされたのが、くつきりと見えてきます。二つの政権が連続して守り切ったもの、——それは「日本」そのものでした。村や町ごとにお宮とお寺がある風景。それが当り前の日本では、複数の思想・宗教が併存し複合してゆるうく調和してゐます。それを真つ向から否定し攻撃してくる唯我独尊のバテレンは「神敵・仏敵」に他ならず、しかも彼らの活動はスペイン・ポルトガル両国の領土的野心と一体化してゐたのですから排除を躊躇ためらふべきではありませんでした。かくて大航海時代の日本は世界史上例外的に祖国防衛に成功し、独立を全うすることができました。神道人として再確認しておきたい歴史のツボだと思ひます。私たちは豊国神社や東照宮の神様にもっと敬意を払つてしかるべきではないでせうかねえ。

*

さてその上で、：我々はいつまでも他を怨みつづけたりはしません、神道・仏教・キリスト教の対話共存の途を模索するとき、口幅ったいけれども、ヒントの一つは三年前の天草にあると感じてゐます。平成二十八年四月の熊本地震から二月足らず、天草では宣教開始から四百五十年になるのを機に、カトリック教会内で神父と住職と宮司による宗教間対話が実現したのですが、それは神父がかつて宣教師たちによる神仏攻撃があつた事実に言及し、率直な反省の弁を述べることから始まつたのです。でなければ、心を開いた三者の対話などあり得なかつたでせう。いつもは賛美歌が流れ、アーメンと響く堂内に、その日その時流れたものは、実にこれ——「浦安の舞」だったのです。参会の人びと（多くはクリスチャン）は昭和天皇さまの平和を願はれる御製に聞き入り、若き女性神職の典雅な舞姿に目を凝らしたのです。あり得ないと思はれてきたことが現実のものとなつてゐるのに気づいた人々の感激は、それはそれは大きなものでした。

かつて神社仏閣が破壊された天草では、いはゆる天草島原の乱のち、この地を治めた代官鈴木重成公のもつて、日本古来の神仏信仰への回帰が図られ、お宮もお寺も旧に倍して復興してゆきました。

ハフライ
果に
まに
ようか
す
す

それからおよそ三百年。昭和天皇の戦後巡幸に他のどこよりも熱狂した天草。秋の町々は神幸行列で湧き、家々の玄関には一年を通して注連縄しめなはがかかり、神宮大麻の奉斎率が県内随一でありつづける天草です。先人たちが引き継いだ苦闘の歴史を思ふにつけ、キシタン・バテレンの島うといふ虚ろな呼び方／呼ばれ方はそろそろ御免蒙りたいのですが、皆さまいかがでせうか。……ありがたうございます。

(熊本県 鈴木神社 宮司)

願いをこめて

佐々木美津子

平成三十一年一月一日朝、ひょうたん鎗矢を手にする人、ひと。小さな町の神社、八十年代九十代のお年寄りの人達が奉納して下さったひょうたん鎗矢。

○長寿を願ひ

○日々の幸せを願ひ

先着二百名の方しか手にすることのできないひょうたん鎗矢。お正月の楽しみ、手作りひょうたん鎗矢なのです。

このお年寄りグループの名前をひょうたん会といい、地元の老人会の方々が天照御祖神社奉賛会との交流を深めようと、元奉賛会会長現相談役の村上宗助様がはじめた会で、今年で十五年になります。

春は、桜を観る会

秋は、紅葉を観る会

冬は、ひょうたん奉納の会と

はじめた頃は神社に集まり食事を食べ、おしゃべりや歌を歌いみんなで楽しんでおりましたが、いつのまにかひょうたん作りを始めました。

四月 畑に種をまき棚を作り実をならせ

九月 まだ暑い陽ざしの中、ひょうたんのとり入れ、水につけひょうたんの皮むき。

十月 乾燥させワックスぬり、ひもでくくり、

十一月 ひょうたんに字を入れ、

十二月 ひょうたん奉納祭。

約九ヶ月の間それぞれの人によって作りあげたひょうたん、水につけ皮を取る時のくさいにほい、ワックスで頭がクラクラした日もあったとか、ひょうたんの字も伊勢の御遷宮の時には遷宮と震災の年は祈り、今年は仲間の一人が米寿を迎えるので寿に決め、字は元会長の担当で今年は百一歳です。

ひょうたん奉納祭の時にはお医者様に来て頂き講話していただいたり、時にはバイオリン演奏、保育園児との交流など、飲んで歌って楽しみ、心安らかに老後の生きがいを求め

ております。地域の大先輩であられますひょうたん会の皆様には、私は宮司として日々助けて頂き、御指導・御協力に感謝の気持ちでいっぱいです。

震災の翌年、避難してきた仮設の人々と一緒に盛岡の南部相撲甚句の高橋会長さんが相撲甚句の魅力を熱く伝え陸前高田の復興をねがい甚句の中に名所を入れ「よみがえり浜の一本松」を歌った時には、震災前の高田の町を思い出し感極まり涙ながら聞きました。震災の日から八年四ヶ月経った今、

あの日、約七万本の松林、たった一本だけ残った「奇跡の一本松」高田の命の母として枝をさして根ざした子供松、そして松ぼっくりの種から芽を出したたくさん、たくさんの子供達がすすくと育ち高田の松原に植樹されております、松の木を守る会をたちあげ、会長はじめ多くの市民の方々、全国あげてのボランティアの方々の協力と努力によって整地された松原の地に、青々と育ち面積が少しづつ少しづつ広がっております、ボランティアの中には高校生や中学生の修学旅行コースに組まれ夏の暑い中、草むしりそして植樹と若い世代の方々が目立っております。あの奇跡の一本松、そして流された多くの松達、きつときつと喜んで見守っていることでしょう。

高田松原の海が青く輝き、かつての海水浴場として、にぎわう日ももうすぐです。子供

たちが波打ちぎわで遊ぶ声、貝を拾う子供達の姿を思いうかべながら、震災でなくなられた人々の御霊をなぐさめ、被災地の一日も早い復興と人々の幸せを願い、女子神職として祈り続けていききたいと思えます。

（岩手県 天照御祖神社 宮司）

目に見えない力

山下 裕嗣

私が以前奉職しておりました「白山本宮加賀一宮白山比咩神社」の宮司でありました、故太田辰巳さんの書かれた講話集で「生かされて生きる」という本があります。その題名の通り、私たちは自分以外の多くの力によって、生かされているのだという事を思い起こして欲しいものです。

今日の演題は「目に見えない力」とさせて頂きました。では、「目に見えない力」とは何なのか？ 神様の御ちから、ご先祖様の御ちから、大自然のちから……。そういった様々な力を頂いているからこそ、生きとし生けるものは、命を維持する事ができているのであります。

これらの力は目には見えませんが、心に訴えかけ、心に問いかけてくれる力なのであります。よく靈感の強い人がいらつしやるようですが、靈感の強い人は、これらの心で感じ

た力を、目に見えるように、手に取るように理解できる方なのだと思います。

私はそんなに靈感が強い方ではありませんが、偶にふと思いつく事がありまして、「あの時の幸運、あの時の不運は、ここから始まったのか？」と、振り返られる時があります。そんな時の自分の状態を思い出して見ますと、早朝の清々しい時や、社務を終えて家でゆっくりできた時など、心の落ち着いている時だという事が判ります。また、心の落ち着いている時だからこそ、目に見えない力の言葉を心に感じ、それに素直に従う事によって、導いて頂けるものだと信じております。

神社でお参りするときは、心身を浄めてから臨むものです。鳥居をくぐり、手水を取り、注連縄の奥に進む時々に、清浄な状態への自分へと移り変わり、最後に修祓を受ける事によって、心身共に浄められた自分が完成します。清々しい自分がそこにあり、清々しい心がそこにあり、素直な自分がそこに居ます。そうする事で心が落ち着き、ようやく、神様の、目に見えない力を頂くことができますのであります。

神道は「祓いの宗教」だとおっしゃる方が居られますが、正にその通り！ ご社頭でご社殿で神様に向かう時、浄め浄めて祓い祓われた自分だからこそ、「感謝」や「祈願」の言霊を発することができ、神様の、目に見えない力の何かを、頂くことができるのであり

ます。さらに頂いた力を素直に受け止め、実践する事が、自分を、向かうべき方向へ誘い、導いてくれるのであります。

さて、朝のおまいりに申し上げる神拝詞には、「直き正しき真心もちて、誠の道に違ふことなく、負ひ持つ業に励ましめ給ひ、家門高く身健かに、世のため人のために尽くさしめ給へ云々」とあります。ここに、今日のテーマの「目に見えない力」のもう一つが隠されているのです。先ほどまで申し上げました「目に見えない力」は、神様、ご先祖様、大自然の力と、本当に見えない力ですが、もう一つの「目に見えない力」は、目には見えなけれども、良く知っている力の事であります。「直き正しき真心」「誠の道」は、自分の心にウソ偽りなくという事。「負ひ持つ業」は、人として社会の一員として、私利も私欲も関係なく為すべき事。「世のため人のために尽くさしめ給へ」を合わせて考えますと……自分の誠の心にウソや偽りなく、人として、社会の一員として、為すべき事、為さねばならない事をしっかりと心に留め置いて、自分の周りの人々のため、地域、社会の為に尽くさせて下さい。……となります。

「目に見えない力」のもう一つは、自分が生きて行くために、周りの人々が動いている。自分だけの為ではなく、他の人々の支えとなるべく、生かされて生きている事をしっかりと

と知るべきである。という事です。

先ずは、身近な「目に見えない力」ですが、家族や同僚、普段付き合いの仲間の力です。特に「家族」多くは血縁で繋がった、自分に一番近い他人。常に気を遣い、常に支え合い、時には意見の対立も生みながらも、切磋琢磨して生活する、最も強い絆で結ばれた仲間です。朝、目覚めの悪い時、夢の中で誰かが朝の訪れを告げてくれます。ようやく起きるとそこには誰も居ない。でも確かに……。母だったり、妻だったり……。また、日々の疲れか、どうも今一つの時には、「大丈夫？」と声をかけてくれて、普段と違った様子を氣遣ってくれる、家族や同僚の姿がそこにあります。

家族や同僚とかじゃなくて、全く知る事のない人々の力も隠れていますよ。朝ご飯、美味しいお米は神様へのお供えからのお下がり。秋に収穫されるお米は一年を通して食卓に上がります。農家さんの苦労は直接は見えないけど、心を込めて作られたのだと思います。通勤通学、電車バスは一日中動いています。運転手さんは一生懸命機械を操作していますが、あれだけ多くの電車バスを、よどみなく走らせているのは、ダイヤを組んだり、整備をしたり、自分の知らない所で人々が働いているお陰です。夜になれば明かりがともり……。言えぱキリの無い「目に見えない力」が、自分の周りで、自分の為に働いている

事に気がつくでしょう。

我が国の三大義務は「勤労」「教育」「納税」です。勤労義務は、自分の収入の為だけではなく、社会の為に働いている事を認識して頂く必要があります。お互いが、持ちつ持たれつ、の中で生活している事、独りでは生きてはけないという事、をしつかりと踏まえて、社会の一員でなければならぬのです。

「目に見えない力」は、神仏や大自然の摂理だけではなく、自分からは見えないけれど、自分を生かして頂ける人の力が働いている事にも感謝し、自身も進んで働く事が大事なのだと思います。

(石川県 白山神社 宮司)

令和の御代

靖國神社御創建百五十年を仰ぐ

芦原高穂

五月一日天皇陛下御即位遊ばされましたが、今年は明治二年がらちようど百五十年めに当たりますが、この年はと云いますと明治ご一新の大業が成され、少なからず新体制移行に目途が附けられ、明治天皇の思し召しにより維新殉難者を祀るため東京招魂社として御創建されましたより、百五十年の節目の年となられたのであります。

例年私達全国の神社が包括関係を結んでおります神社本庁の最高議決機関である評議員会が春五月と秋十月に開催され、特に春の評議員会は青葉会議と言われ、全国総代会を始め記念式典では表彰式を始め神道文化会、ほか諸会議が開催されますが、毎年評議員会では、全国の神社庁より選任された評議員から十名以上の賛成者の署名捺印で神社本庁の活動についての要望事項が提出され審議されております。

私も評議員を務めて二期六年が経過し、本年の評議員会では予算案などの議案に追加す

る形で、評議員提出議案として上程されるのでありますが、これが神社本庁の年間活動の大きな指針になっているといつて過言ではないと思います。

本年の評議員会では、要約しますと

- ・上皇陛下聖徳を後世に伝え、天皇陛下の御即位奉祝と、〔東海・関東地区〕
- ・日本書記編纂一千三百年を控え神話の心を広報活動を活発化する〔九州地区〕
- ・憲法改正に向け、自主憲法を明確に示す〔関東地区〕
- ・靖國神社御創建百五十年に当たり、英靈顕彰護持顕現と国内外の神社及び慰霊施設の奉護と死生観や慰霊の文化を内外に啓発する〔東海、北海道、東北地区〕

以上の四件が上程され決定されたわけであります。

先日『週刊金曜日』という雑誌の取材を受けたことがございます

その折りに「どうして、神社本庁は安倍政権の肩を持って憲法改正などの保守的な運動を熱心にやるんですか、取材をすると神社の関係者でも安部さんに批判的な人はたくさんいますよ」と質問されたことがあります。

私は、

神社本庁は決して独善でそうした運動を展開しているのではなく、毎年春秋の評議員会

という神社本庁最高議決機関の会議、特に春の評議員会では、皇室敬慕や、憲法改正、歴史教育、英霊を祀るなどの意見が寄せられて審議し決定し、それが年間の神社本庁の活動の基本になってくるので、執行部が勝手にいろんなことをやっているではありませんとこたえました。

件の記者は

それでは、それではそこで、憲法を変えないという決定がされれば神社本庁はそうに活動するのですか、

ちよつと想像できませんが、可能性はあります。

と応えたことがあります。

普段神社本庁の評議員会なんて何をやっているだろうと思われ勝ちですが、本庁の活動の指針が決まってくるので、おろそかにする事はできないと思います。

今回この決議案の提出には、一つの思いがありました。

それは、令和の御代を迎え、新たな時代を迎えての歓喜につつまれているような感じがしているわけで在りますが、思えば異国地に愛しい妻子や家族に分かれを告げ、祖国のためとは言いながら、一命を捧げられた英霊の存在を見失うことは、御魂によってもたらさ

れた戦後の繁栄を享受してきたものとして許されることではないと思います。

昭和を通じて靖國神社のみならず全国津々浦々で郷土出身の戦没者を追悼する行事が行われてきましたが、遺族の減少と共に規模を縮小したり沙汰止みになったり、中止になったりする傾向があり、極めて嘆かわしいことと思うわけがあります。

つたない経験ですが、平成二十四年皇居勤労奉仕に参加してご会釈をいただいた折、次の団体に移りかけた瞬間時の皇后陛下より、

「お宮の名は」

とのご下問があり

「顕勲神社奉賛会と申しまして、英霊を祀る神社の役員で参りました。」

と奉答いたしましたところ、一瞬であります、俄に表情が変わり、何か触れてはならないものに触れたような厳しい表情からすぐにいつもお優しい眼差しで、

「御魂のお世話をいただいている方々ですね」

とのご下問に

「左様でございます」

とお答えし、陛下からは

「暮れ暮れも宜しくお伝え下さい」

とのお言葉をいただいた訳あります。

両陛下の英霊に対する敬慕の心は我々では計り知ることの出来ない深いものがあるのだとつくづく身にしみて感じられたわけであります。

この時はじめて我々が英霊を祀るお祭りは正に両陛下に代わって務めると云うことであり、常に祖国日本のいしずえとなった人々の魂を見据えていかなければならないのだと思ひ知らされました。

(北海道 旭川神社 宮司)

『祈る』ことの大切さ

宮 田 修

お祈りをして何になるの。効果ないでしょう。単なる気休めでしかないのではないですか。困った時の神頼み―その程度のことではないですか。このように考える人が多いのではないだろうか。それは私にも良くわかる。なぜならかつて自分もそうであったからである。〴〵祈る―第一に科学的ではない。同時に祈ったとしてもそれが叶うことはほとんどないのではないか。その私が想像だにしていなかった神職になって、ご神前で〴〵祈りを捧げなくてはならなくなった。自身の中で矛盾を抱えてしまった。〴〵祈る〴〵とはどういうことなのか当然のことながら関心をもつて考えなくてはならなくなった。

そんな折、筑波大学名誉教授の村上和雄氏の『人は何のために「祈る」か』と言う本に興味をそそられた。冒頭にこんなことが書かれている。アメリカの病院で行われた祈りの効用に関する研究結果だそうだ。重い心臓病患者三百九十三名を対象に、一人一人に向け

て回復の祈りを行い、祈らないグループとの比較をしたところ、祈られたグループの患者群の方が祈られなかったグループの患者群より症状が改善されたというのである。つまりは祈ったことが何らかの形で良い影響を及ぼしたと筆者は記している。最初にこれを読んだ時、信じられなかった。しかし事実なのであろう。村上先生は、祈るといふ行為は、心身の健康に想像以上に効く」と述べている。さらにこうしたこともあってアメリカでは祈りに着目する科学者が多いというのだ。祈りを科学的に研究することが行われていると言うのである。私は、この本を読んでから自分自身の「祈り」について内省を始めてみた。神道において神に手を合わせるといふことはどういふことなのかを考えてみた。

日本人は、自らの一生を神さまと共に過ごすと考えてきた。それが氏神さまである。人生の節目節目で氏神さまに報告をしている。初宮参り、七五三、結婚式、初詣、厄祓いなど、事あるごとに神社に詣でてきた。現在では神さまにお願い事をするという意味合いが強くなってきたが、本来は、神さまへの報告であった。初宮参りは生まれた子どもを氏子にしてみらうためであり、七五三は子どもの成長を神さまに見ていただくためであった。初詣は、本来神さまに新年のご挨拶を申し上げるのが趣旨であり、その年の御利益を願うものではなかったはずである。最近は神さまに何かと期待する傾向が強くなったとは

いえ、日本人は常に神さまとともに暮らそうと考えていることには変わらない。

常に祈りながら生きてきたのである。それを踏まえてこの現代社会で祈りの意味をどう考えたらよいのであろうか。

氏子さんたちに毎朝、神棚に手を合わせてくださいと勧めている。その際、なぜ神棚に手を合わせるべきなのかと質問されたら私はどのように答えるべきなのかを考えてみた。私が生まれつきの神職であればこのような時の答えは当然持ち合わせているのだろうが、何せにわか神主である。しかも以前とはまったく異なる考えを披歴するのだから用意しなければならぬ。

朝、神棚に手を合わせて一日の無事を神さまに「祈る」。そしてその後、出かけることが多いであろう。車を運転する。私たちは、ついついアクセルに力が入り、スピードが出してしまいがちである。そんな時、心の中の神さまが「そんなにスピードを出してはいけませんよ」と言ってくれるのではないだろうか。日本人は、生まれてから死ぬまで常に神さまと共に日々を過ごし、心の中にはいつも神さまがいらっしやると考えている。しかし人間である私たちは、時としてそのことを忘れてしまいがちである。朝、神棚に手を合わせることによって、心の中の神さまをより一層強く意識し直すためのいわば「儀式」では

ないだろうか。神さまのお力をより強くした上でその日をスタートさせるのではないかと考えてみた。正直に言えばかつての私はこのように考えたことはなかった。自らを振り返ることなどほとんどなく常に走り続けていたように思う。しかも急いで走っていた。どのようにすれば効率的なのか。どうすれば競争に勝てるのがテーマであった。それが科学的なことであり、現代人にはそれが求められていると固く信じていた。

祈るということは、立ち止まることである。そして自らを振り返ることであるのではないかと最近考えている。そんなこと当たり前だと言われてしまうかも知れないが、それがないのが現代の日本人の姿かもしれない。余裕がない。急いでいる。周囲を見渡そうとしない。これは、健康に良くない。

心臓病の患者が祈ることによって祈らなかつた人より症状が改善したという。私は、なるほどそうだろうなと思えるようになってきた。祈ることによってわれわれの心は余裕を持つことができるようになる。それが「改善」に繋がったのではないだろうか。私はこれから氏子さんたちに「科学的」に祈りを勧めたいと考えている。そのためにのもって考えを深めたいものである。

令和の世の賞味期限

村田和之

お蔭様で孫も数人成人を迎え、自らは年老いて賞味期限を間近に迎えようとしています。が、孫の一人に、賞味期限を忠実に守っている子が居ります。

私は昭和戦前の生まれで、少々賞味期限が過ぎていても、お構いなしに期限切れのパンやお菓子、野菜等食べるのですが、一向に腹痛も起こること無く過ごしています。しかし、その孫は賞味期限が過ぎたら絶対に口にしません。

御存知のように賞味期限とは、消費期限とは違って、食べない方がいいのではなく、品質が変わらずにおいしく食べられる期限のことを言います。ですから、その日付以降は、少し味が落ちて来ますよという意味を持っているのであって、決して期日が過ぎて食べられないという意味ではありません。

さて、話は替わって、今年五月一日、平成の時代が幕を閉じ「令和」となりました。

国の内外にも、天地にも平和が達成されるという意味を込められた平成の時代は、上皇陛下の戦争の無い平和の時代への祈りと共に無事に幕を閉じました。今迄元号は中国の古典から引用されていましたが、「令和」は日本最古の歌集、つまりは国書からの引用でした。常に国民と国を思い平和を祈られる陛下の御代を、「令和」と改元、人々が美しく心を寄せ合う中で文化が生まれ育つと言う意味を含んでいるのであります。

私も年老いて往く身、人生の賞味期限が近づき、ほつほつ就活の準備をしなければならないと気付き、見渡すと、何かしら世間では日本人離れした様子が垣間見られます。不安を感じるのは私一人でしょうか。

特に、最近の葬儀を見ると、自殺や若死にする人が増え、葬儀も家族葬が目立つのであります。寺院も神社界と同じく四割位が立ち行かず、吸収合併したとの話を耳にしました。家族も大家族制度から核家族となり数十年が経過し、長男が跡を継がず先祖を守る後継者が無いご家庭も多いと聞きます。

今は個人が選ぶ時代。葬儀も経費の差はもちろんのこと、様々に種類があります。自然葬や樹木葬も増えて来ました。都立の霊園業者に尋ねると、樹木墓地を企画し五百体の遺骨を募集したところ、予定の十六倍の募集があったとか。樹木葬では通常の遺骨は十三万

円あまりですが、粉状になった遺骨の場合は四万円あまりで済むとか。

葬儀にも色々と変化が生じ、鳥獣葬や風葬と昔に戻っているものもあれば、飛行機で空から撒いたり、川や海に流す散骨、宇宙葬なるものまであります。宇宙葬にすると、骨一グラムで二百五十万円掛かるそうです。また、妻が亡くなると参列者が多く主人が亡くなると参列者が少ないことから考え出された生前葬、病院から火葬場へ直接向かう直葬など驚くような葬儀が沢山あります。

浄土真宗の宗祖、親鸞聖人の遺言には「私が死んだら川に捨て魚に与えよ」とありますし、真言宗の開祖、空海は様々に伝承がありますが、生き仏とされた人で、洞窟に入って行かれ供養はしないようにと告げられたと言います。

お墓も血縁関係の無い仲良しグループで一緒に入る友墓、知らない複数の人と一緒に入る合葬墓、一人で入る個人墓、墓を無くする墓じまい。中にはちゃっかり赤の他人の墓、いつもきれいで大きな墓に許可なく無断で納骨する人までいるそうです。

たまに新幹線の棚の上に骨壺が取り残されていることを聞きますが、それは処分して欲しく、取れて忘れたように振る舞われる場合もあるそうです。本当ならすぐに届けがあるはずです。

仏教の真の教えは、宗派にもよりますが、「南無阿弥陀仏」「南無妙法蓮華經」「南無釈迦牟尼仏」「南無大師遍照金剛」と唱えていれば、仏はその人を浄土に迎えて下さる。そのことを信じていれば、あなたはちつとも死後の事を心配する必要はないのだと説かれていて、葬儀はやつてもやらなくても良いと言っています。

キリスト教でも死後の葬儀をやるうがやるまいがは問題ではなく、むしろ死の直前に司祭や牧師によつて祈られることの方が重要だとされて、葬儀やお墓の心配をする必要はないと教えています。しかし日本ではどちらも立派な葬儀をし、供養をするよう説かれて来ました。

日本の仏教は神道仏教とも言われ、仏教の葬儀の中には日本古来の教えが根底にあるのです。

日本書紀のイザナミノミコトが神去りました時、紀伊国熊野の有馬村葬し奉ったことを記す条には

「土俗、此の神の魂を祭るには、花の時には亦花を以ちて祭る。又鼓・吹・幡旗を用ちて、歌舞ひて祭る」

とあつて、日本民族の古い時代の供養がどのように執り行われていたかを伺い知ることが

出来る貴重な資料となっています。

我が国の古い時代の人々は、故人があたかも生きているかのように御饌、御衣をお供えしてまつり、各家では年長者などの長が我が国本来の信念により祖先の「みたま」を大切に守り、讃え崇めて来たのです。長い歴史の中で「祖先を大切に、祖先を偲ぶ」ことが人間として最も大切であるという信仰が日本人に育まれて来ました。

自然崇拜と共に、祖先崇拜を重んじ、世界中で一番古い皇室を頂き、文化・伝統を受け継いで来た日本人魂を忘れてはいけません。

日本人の死生観、伊勢豊受神宮の祠官、中西直方の詠歌集『神道百首』の中に、「日の本に生まれ出でにし益人は神より出て神に入るなり」とあります。

御即位された今上陛下が今年四月、上皇陛下がお手播きされた苗を五月二十日、御田植えされる姿を拝見しました。今上陛下は、上皇陛下が平成の御代に守り伝えお示しになった象徴としての手振り・お姿を受け継がれ、歴代天皇のなさりようを心にとどめられ、常に国民に寄り添い、憲法にのっとり日本国及び日本国民統合の象徴としての責務を一人静かに守り伝えて居られるのです。

皇室の御祖先にあたる天照大神様から授けられた稲。稲作を大切に守り今の世に伝えて

居られる今上陛下のお姿を拝見し、私達は日本の国の歴史を知り、お手本を示される今上陛下の大御心に応えていかなければなりません。よく拝見する陛下の御田植姿も、数株だけ植えて居られるように見受けられますが、実際は明くる日に何百株もの苗を植えられているのです。

また陛下が行われる正月早朝の四方拝も、自分の事を祈られるのではなく、国民をはじめ世界の人々の安寧を四方の神々に祈っておられるのです。

私達はこの尊い天皇陛下を頂き暮らしている事を、もう少し知る必要があります。

御代替りの時、「歴代の天皇のなさりようを心にとどめて自己研鑽に励みたい」とおっしゃったお言葉を私達は忘れてはいけません。

国民を思い国民のために祈っておられる天皇陛下。こんなに有難いことは他にはないのではないのでしょうか。

わがくには神のすゑなり神まつる昔のでぶりわするなよゆめ

（明治天皇御製）

（広島県 長束神社 宮司）

日本人の心

『日本神話とみそぎ』

山 本 行 恭

七月十四日、海の日の前日に長野県小諸市に参りました。そこには菱野温泉がありました。その奥に、高さ十メートル程の不動の滝があります。そこで毎年当社の崇敬会である椿講の支部の恒例行事として滝開きをします。その際、支部を束ねる支部長より滝行での道彦と講演の依頼を受け、私が出向して奉仕させていただきます。参加される方は、神社界の方々ではなく一般の皆様です。そして本年は若い方がとりわけ多い中で「日本人の心」日本神話とみそぎ」と題し講演いたしました。本日はそのシチュエーションで、お話しさせていただきます。

ご承知の通り、吉本興業の芸人十三人が闇営業ということで処罰を受けました。あろうことか口裏を合わせて「一円も貰っていないことにしよう」と彼らは、高を括った訳で

す。ところが隠しきれずに明るみになった。ひどいことをするなあと思ったのは私だけではないと思います。しかしそこに加えて某番組はその断罪をしないで、まだテレビに出演させると言ったのです。これはまったく報道関係としては隅に置けないような大罪だと思います。結局暴露され、トップは百万円貰っていたことが分かりました。そういつたことが実際にメディアで報道され、老若男女に笑いを与える立場の人間が堂々とかういう事をやっているということは、非常に矛盾を感じる訳です。

ハーバード大学のグリニッチ学長は五十年程前に、ある論文を発表しました。その論文は何かというと「子供の脳」についてのものでした。脳の構成は五歳までに決まるということです。そしてその割合は成人の約七割だということです。その幼き脳に直接インプットされるものは、社会環境と自然環境が上手に組みされていなければ為し得ないとのこと。私はそれを聞いて如何に環境が大事かと、ふっと思いました。ということは、吉本の芸人たちは素晴らしい環境下で生活をしていなかったのではないかと思います。よしんば正しい生活をしていたとしても、どこかで屈折してしまっただけで人を侮ってしまうようなことをしてしまったのでしょうか。このことは申し訳ないでは済まされないことだと思います。よく親御さんが自分の子供や孫に対して、なにか悪いことや粗相をしたときに「まあまあ子供

のすることだからいいじゃないか」と目を瞑ってしまうことが往々にしてある。自分の子供や孫に対してはどうしてもそうなってしまう氣もあるけれども、その子の事を真剣に考えるのであれば「駄目なものは駄目!」と言い聞かせないといけない。子供と言うのは「駄目!」と大きな声で言われると、ビクツとして「これは、してはいけないことなんだ」と自然に思う訳です。そして良いことをしたら「良くやったね」と右の耳から聞こえるように褒めてあげる。右脳は感性ですから。それを上手に使っていくことによって人間というのは大きく成長をしていくのです。

幕末福井の歌人・国学者で「嘘言うな、物欲しがるな、体だわるな」といった橘曙覧という方がいました。私は学生時代にこの言葉を聞いて「素晴らしい言葉だなあ」と思いました。嘘言つてはいけない、当然ですよ。物欲しがるな、あくまでも自分の器を知らなければいけない。そして、のんきに過ごすのではなく常に考え行動しなければならぬということであります。ここで、日本人の心で何が大事なのかを説明します。それは道徳という徳性です。これがなければ人間は成り立たない。道徳の「徳」という字は、心の上に一本線が入っています。私が宮司を務める椿大神社では毎年その年の漢字一文字を決めて、揭示すると共にその意味を講話しているのですが、数年前にこの「徳」という字を選び、

参拝者の皆様の前でお話しをした際、ある参拝者から「神主、そんな漢字は、今は使わないぞ」と言われました。それに対し私は「そうでしょうか。芸能人の歌手で、この字を使っている人が居ます。それは徳永秀明さんです。なぜ彼はこの漢字を使っていると思いますか」と答えました。その後「徳」について、こう説明しました。行人偏は、【歩む・行く】という意味です。また右側は素直の「直」と「心」で形成されています。つまり「素直な心で歩まなければいけない」ということがこの字の原点です。だからあえて一本入っているこちらを使っています。つまり人間は生まれながらに徳性を養わなければいけないのです。まず徳の有ることをしなければならぬわけです。とするならば橘曙覧のおっしゃった言葉が誠に重要なものだと思うことが往々にしてあります。それは、昨今、とんでもない事件、くだらないことが起こっている世の中だから余計に思わざるを得ないのです。また、スイスの哲学者アン・フレデリック・アミエルという方が、非常に長い日記を残しています。その中の一つに、人生は習慣の織物だと言っています。善なることも非なる事もあるかもしれないが、毎日毎日それを積み重ねていくと、縦と横が上手に重なっていき良い物が生まれてくるということです。これを踏まえて、赤ちゃんを思い浮かべて下さい。徳性の中には二つあります。一つ目は明暗、つまり明るいことと暗いことです。赤ちゃん

は明るいところを好み、暗いところを怖がります。なぜか、それは人間の心理だからです。昔、子供は悪いことをすると蔵に閉じ込められたりしたと思います。では反対の明というのはどういう風に作っていか。朝昼晩いろいろな生活の中で頂く物がある。ああ美味しいねってことを教える。家庭内で美味しい物を食べたときに「美味しいね」と何度も子供に言う、これは美味しいんだとインプットされるのです。ところが、うちの子供が小学校の時に、洗面所のタオルを、お父さんのタオルはお父さんが使う、家族の物は家族が使うんだと言って別けて使っていました。なぜかという、お父さんは汚いから臭いからだそうです。それは誰が言っていると思いますか。それは、親であるお母さんが言っているからです。だから子供は、そのことがインプットされてそういう風に言ってしまうようになったのです。実際には臭くないんです。このように親の言動で明暗が生まれてきます。二つ目は清潔と不潔です。神社界は特に清潔を氣にしますよね。特に今は良くないですね。おむつの話をしますが、現代のおむつは濡れても感じないように作られているそうです。たしかに便利であると思います。私たちの時代はロールの布でした。当然濡れてズクズクになると子供は嫌がり泣くんです。気持ち悪いと体感で不浄な状態を感じるからです。このように便利にはなっているが子供が不浄な物を感じる機会が少なくなってしまった現代

においては、徳性も同様に薄らいでいくことです。成長と同時に、我々はやはり悪いことをしてはいけないんだと、親から、家庭から、周りから、自然から教えて頂く、これが本当の日本人の心であります。そして日本人の心の原点にあるのが神道です。この神道というのは更に凄いです。神道の基本理念は「清明正直」です。常に「清く明るく正しく直く」ということだけでも、これだけではどういうことかわからない。まずこれを説明するにあたって、我々は神様に対して何をしなければならぬかを話します。明日は滝に入ります。一緒に注連縄を張って酒塩で清めて、ロウソクを灯して不浄な物を祓え除け、魔を寄せ付けないようにしつらえをして男性はふんどし、女性は水衣に着替えて滝に入ることになります。神様は不潔なところには絶対に存在しないんです。神様に喜んで頂く方法は一つです。至る所を綺麗にすることです。神様が喜んで頂いていることは目には見えないけれども、その場所を訪れた方々が「ああ綺麗にしておりますね。気持ちが良いです。」と言ってくれる、その言葉が、まさに神様の声じゃないですか。つまり神様に対して人間は「清明正直」という重要な精神がなければやっていけないということです。

なぜみそぎをするのかよく質問されます。最近政治家で「みそぎをして身も心もきれいになりました」と言う人がいますが、私は「嘘言うな」って思います。本来のみそぎとは、

荒々しい滝に入って真剣に何度も何度も祈ることです。一回の軽々なみそぎできれいになるなんてとんでもないことです。そしてみそぎは単なる手段であつて、決してそれをする事によつてすべてがきれいになるという結果を生むものではないのです。手段であるみそぎをすることによつてどんどん自分が浄化されていつて、橘曙覧の言葉のようなことが全身全霊に宿ったときに、人は「立派な方がいらっしゃるなあ」というオーラに包まれてくるのだと思います。つまり、一回したらいいや、ではなく重ねてやらなければならぬのです。私は毎年こちらで講演させていただいていますが、毎回顔ぶれが違ふことが氣になるんです。様々なご事情があり、来たくても来れないことも勿論あると思いますが、自分自身を進化向上させたいという強い意識があるのならば、必ず次回も来ると自ら約束しないとイケないと思います。もし約束したにも関わらず事情でどうしても来れない場合は、家で真剣な氣持ちで水をかぶつたらいいんです。みそぎとは必ず滝がなくては出来ないというものではありません。みそぎは心です。なぜこんなことをいうかというと、神話にそのことが記されているからです。

伊邪那岐命・伊邪那美命というご夫婦の神様が居ました。伊邪那美命は、それぞれの島を治める神様を生みました。それに続いて、石や土の神様、家の神様、風の神様、川や海

の神様、山の神様と、たくさん神様が生まれてきましたが、火の神様を生んだとき、伊邪那美命は大やけどをしてしまい、とうとう亡くなってしまう。伊邪那美命が亡くなってからしばらくの間、伊邪那岐命は一人で悲しんでいましたが、どうしても我慢することができなくなり、死者の国まで妻をむかえに行こうと思いましたが、死者の国は、黄泉の国といって、深い地の底にあるのです。伊邪那美命は、地の底へと続く長い暗い道を下りて行きました。ようやく黄泉の国に着くと、伊邪那岐命は扉の前に立ち、伊邪那美命に、自分と一緒に地上へ帰ってくれるよう、優しく呼びかけました。ところが中からは、伊邪那美命の悲しそうな声が帰ってきました。「どうしてもっと早く来てくれなかったの。私は、もう黄泉の国の食べ物食べてしまいました。ですから、地上へはもどれないのです。けれども愛するあなたの為ですから、地上へ帰ってもよいかどうか、黄泉の国の神様に尋ねてみましょう。それまで、私の姿を決して覗かないでくださいね」そう言われて、伊邪那岐命はじっと待っていました。いつまでたっても妻からは返事がありません。とうとう待ちくたびれた伊邪那岐命は、小さな火を灯して、妻を探すために黄泉の国へと入っていったのです。黄泉の国は、どこまでも真っ暗なやみが続いています。うす暗い灯りをもつて、目をこらしていた伊邪那岐命は、思わず「あっ」と叫んで立ちつくしました。何とそ

こには、腐りかけてうじ虫が湧いた、伊邪那美命の姿がありました。「あれほど覗かないでと言ったのに、あなたは私に恥をかかせましたね」自分の醜い姿を覗かれてしまった伊邪那美命は、髪の毛を逆立てて凄まじく怒りました。「伊邪那岐命を捕まえて、殺しておしまい」伊邪那美命がそう命令するや、黄泉醜女という悪霊たちが、伊邪那岐命を捕まえようと、あちらこちらから湧き出るように現れました。伊邪那岐命は地上へ続く黄泉平坂に向かって、必死に逃げました。伊邪那美命と黄泉醜女たちは、凄まじい勢いで迫ってきます。伊邪那岐命は懸命に走りながら、髪飾りを放り投げました。すると髪飾りからは、たちまち野葡萄の木が育って、たくさんの実になりました。それを見た黄泉醜女たちは立ち止まって、実を食べ始めたので、その隙に、伊邪那岐命はどんどん走りました。けれどもしばらくすると、また悪霊たちが追いついてきます。伊邪那岐命は、今度は髪に刺していた櫛を放り投げました。すると、そこからは竹の子が次々に生え、黄泉醜女たちはまた立ち止まって、食べ始めました。こうして懸命に逃げる伊邪那岐命の行く手に、ようやく地上の世界が見えてきました。しかし黄泉醜女たちは群れをなして追いついてきます。ようやく坂の麓までたどり着くと、そこに生えていた桃の木になっていた実を三つもぎとって、黄泉醜女たちに投げつけました。すると、桃の実の不思議な力に恐れをなした黄泉醜

女たちは、逃げ散ってしまい、何とか地上に戻ることが出来ました。そして、伊邪那岐命は「私はとても穢れてしまったので、みそぎをしなければならぬ」と言つて橘の小門の阿波岐原に行き、上流は水の流れが速く、下流は遅いからといって、中ほどで鉾を立て結界を張つて着ている物を全部脱いでみそぎをしました。そして左目を洗ったときに天照大神、右目を洗ったときに月読命、鼻を洗ったときに須佐之男命がお生まれになり、これからほとんど日本が栄えました。つまりこのようなことをしなければ本当の物事は成就しない。先程、言つたように、みそぎはあくまでも手段であります。伊邪那岐命がみそぎをして、それで終わるのではなくどんどん次に展開していつて発展していったように、結果を生む一つの手段がみそぎということです。そのことをよく覚えておいて下さい。明日は、本日の雨できつと滝の水量は多いでしょうが、是非氣持ちを一つに結んでやるからには真剣にやりましょう。まず入るときの注意ですが、頭の真上で水を受けないことが重要です。数年前、私の友人でもろに頭の上で水を受け三日間寝込んでしまったということがありました。明日は、私が一番最初に入りますから、皆様方はそれを見て何処に入ったら良いのかを摸索して下さい。

最後に、長野県小諸市佐久平の稲食品工業株式会社という会社に元社長の塚越弘氏とい

う方がいました。この方は職員を非常に可愛がり、うちの職員を日本一の職員にしてあげようと気持ちを結ばれ発起されました。どのようにしたか。一つは日本一綺麗な駐車場にしようといつて全車両を一センチも狂い無く正確に停めさせたんです。あと一つは、会社の車輛入口の前の道路が一本道で、右折で入ってこようとすると、対向車両が途切れるまで待たないといけなくなり大変な渋滞を起こしてしまうからといって、遠回りをして左折で入りなさいとしました。そのお陰で渋滞することなくスムーズに入れるようになりました。この二つが正に日本人の心です。人様に迷惑かけたらいけない、この精神が神道で言う惟神です。塚越氏がみそぎをしていたわけでは無いですが、人間の本来の心を持っている人は、必ず何か人様の為に役立つことをして差し上げる。その結果が全職員に、また繁栄、富の有ることに繋がると言うわけです。これが稲食品工業株式会社のステータスであります。これも自然の中で培われた大事な物だと思ふのです。別にみそぎに関係したことでないけれども、日本人の心というのは、決して目に見えるものではないけれども、やろうと思つたら何だつて出来る、そのやろうと思うことの大切さを、明日のみそぎの前にお話ししたかったです。明日のみそぎはお互いに心してやりましょう。

神道講演全国協議会 役員名簿

— 幹事五十音順 —

会長

山本行恭

椿大神社

宮司

副会長

戸内康雅

心清水八幡神社

宮司

副会長

芦原高穂

旭川神社

宮司

参事

村田和之

長束神社

宮司

参事

落合偉洲

久能山東照宮

宮司

幹事

山下裕嗣

白山神社

宮司

幹事

荒木真幸

月山神社

宮司

幹事

生 薦 經 和

松尾大社

宮司

幹事

井 出 舜

諏訪神社

宮司

幹事

小 野 日 隆

八坂社

宮司

幹事

鍵 三 夫

志波彦神社鹽竈神社

宮司

幹事

河 本 文 夫

宮尾八幡宮

宮司

幹事

木 下 久 榮

大江八幡宮

宮司

幹事

佐々木美津子

天照御祖神社

宮司

幹事・監査
幹事
幹事・監査
幹事
幹事
幹事
幹事
幹事
幹事
事務局長
事務局員

營芝山村宮宮松塙中谷鈴
田田瀬田川吉木屋田木
英幸一佳宣東明
聖介孝子修脩和男豐勉子

立木神社
 劍緒神社
 稻荷神社
 笠間稻荷神社
 乃木神社
 福井県護国神社
 熊野神社
 長束神社
 静内神社
 椿大神社
 椿大神社

權襴宜 宮司 宮司 宮司 宮司 宮司 宮司 權襴宜

令和元年七月九州大会現在

神道講演全国大会のあゆみ

大会	開催年月日	開催場所	大会会長	実行委員長	事務局長	講話集
第一回 東京大会	昭和四六年八月四～六日	神社本庁		石沢 久英	久保田博人	
第二回 広島大会	昭和五〇年八月八～一〇日	塩屋神社		石沢 久英	河野 貞愛	
第三回 伊勢大会	昭和五四年八月二七～二九日	神宮会館		猪瀬 好一	山本 行隆	五十鈴川
第四回 九州大会	昭和五八年六月七～一〇日	太宰府天満宮		西高辻信貞	宇都宮正元	神国の春
第五回 みちのく大会	平成元年八月二一～二三日	高山稲荷神社	工藤 伊豆	新山 昌孝	平澤 明穂	平成の民の祈り
第六回 伊勢大会	平成二年八月二〇～二二日	椿大神社	岡本 健治	山本 行隆	二橋 一彦	うまし国日本
第七回 東京大会	平成三年八月二七～二九日	全国神社会館	大野 俊康	山本 行隆	青島清三郎	食国の祈り
第八回 宮崎大会	平成四年八月二四～二六日	宮崎神宮	大宮 四郎	山本 行隆	本部 雅裕	
第九回 愛媛大会	平成五年七月一九～二二日	愛媛県護国神社	大宮 四郎	山本 行隆	小川 純生	天翔るみたま
第一〇回 東京大会	平成六年七月二一～二三日	靖國神社	大宮 四郎	山本 行隆	坂 明夫	
第一一回 北海道大会	平成七年八月三～五日	鳥取神社	山本 行隆	鈴木 瑞彦	奥谷由起子	大禊
第二二回 広島大会	平成八年七月一六～一八日	三瀧荘	山本 行隆	村田 和之	村田 和弘	

大 会		開催年月日		開催場所		大会会長		実行委員長		事務局長		講話集	
第一三回	伊勢大会	平成九年七月一七～一九日		神宮会館		山本 行隆		矢野 憲一		中村 昌司		神路山	
第一四回	京都大会	平成一〇年八月二七～二九日		八坂神社		真弓 常忠		佐古 一洌		嶋田 達久		追憶	
第一五回	東京大会	平成一一年九月九～一日		全国神社社会館		宮西 惟道		村田 和之		生鷲 經和		神国の教え	
第一六回	愛媛大会	平成一二年八月二三～二五日		石鎚神社		十亀 興美		村田 和之		生鷲 經和		伊予の雄叫	
第一七回	石川大会	平成一三年九月四～六日		白山比咩神社		山崎 宗弘		村田 和之		生鷲 經和		白嶺	
第一八回	鹿児島大会	平成一四年八月二一～二三日		霧島神宮		高橋 弘平		村田 和之		生鷲 經和		肇国の誓ひ	
第一九回	愛知大会	平成一五年六月二五～二七日		熱田神宮		小串 和夫		村田 和之		生鷲 經和		剣のこころ	
第二〇回	島根大会	平成一六年七月一三～一五日		出雲大社		千家 尊祐		村田 和之		生鷲 經和		国引の集い	
第二一回	宮城大会	平成一七年八月二三～二五日		志波彦神社鹽竈神社		宇仁 繁儀		村田 和之		生鷲 經和		鹽竈ざくら	
第二二回	北海道大会	平成一八年六月二二～二三日		士別神社		佐藤 公聰		村田 和之		生鷲 經和		朔北のいぶき	
第二三回	奈良大会	平成一九年六月一八～二〇日		石上神宮		森 正光		村田 和之		生鷲 經和		布留の鼓動	
第二四回	伊勢大会	平成二〇年六月一七～一九日		神宮会館		高城 治延		村田 和之		畠田 明彦		神風のむすび	
第二五回	茨城大会	平成二一年六月二四～二六日		茨城県神社庁		塙 東男		村田 和之		畠田 明彦		常陸の折り	
第二六回	山口大会	平成二二年六月二二～二四日		松陰神社		上田 俊成		村田 和之		畠田 明彦		至誠のかがみ	

大会	開催年月日	開催場所	大会会長	実行委員長	事務局長	講話集
第二七回 沖縄大会	平成三年六月二二～一四日	波上宮	末安 大孝	村田 和之	畠田 明彦	魂の島から
第二八回 愛媛大会	平成四年八月二八～三〇日	石鎚神社	十亀 興美	佐古 一洌	畠田 明彦	愛比賣の睦び
第二九回 京都大会	平成五年六月一一～一三日	京都府神社庁	田中 恆清	佐古 一洌	畠田 明彦	平安の念ひ
第三〇回 石川大会	平成六年六月一一～一三日	白山比咩神社	村山 和臣	佐古 一洌	畠田 明彦	くくり
第三一回 伊勢大会	平成七年七月一三～一五日	椿大神社	石上 紀男	落合 偉洲	大竹 久雄	御みちびき
第三二回 東北大会	平成八年七月一九～二二日	盛岡八幡宮	藤原 隆磨	落合 偉洲	大竹 久雄	みちのくのいのり
第三三回 北海道大会	平成九年六月二〇～二二日	北海道神宮	落合 偉洲	山本 行恭	大竹 久雄	北鎮のおたけび
第三四回 関東大会	平成三十年六月一九～二二日	鶴岡八幡宮	山本 行恭	戸内 康雅	大竹 久雄	鎌府の言霊
第三五回 九州大会	令和元年七月一六日～一八日	佐嘉神社	山本 行恭	戸内 康雅	芝 幸介	栄の国から 令和の祈り

講話集 栄の国から令和の祈り

—第三十五回 神道講演全国研修大会 九州大会—

発行

令和2年7月1日

編集者

装幀者

神道講演全国協議会事務局

印刷所

製本所

三重県いなべ市北勢町阿下喜一六七一一
共栄堂印刷株式会社

発行所

神道講演全国協議会

五九〇三五 三重県鈴鹿市山本町一八七一
TEL〇五九(三七二)一五二五(代)
FAX〇五九(三七二)一六六八

橿大神社社務所内

落丁・乱丁の場合はお取り替えいたします



